

第2章 時制と相

■時制

(01) 英語の時制はいくつか

時間は万人に公平な普遍的な概念であり、民族や言語によって時間が変わることはない。しかし、ある動作や状態の時間関係を言語で表現する場合、どのような動詞の形で表現するかは言語によって異なる。もちろん *yesterday* や *tomorrow* などの副詞でも時間関係を表すことは可能であるが、最も一般的な形式は動詞の語形変化なのである。この動作や状態の時間関係を表す動詞の形態を *tense* という。日本語で「時制」という。研究社の『新英語学辞典』(1987)によれば「時制とは、動詞における時間的關係を示す文法範疇」とある。動詞の語形変化だけからみれば、英語には現在時制 (*present tense*)と過去時制 (*past tense*)の2種類しかない。

Dr. Higgins's room

時間が万人にとって普遍的な概念であるとは断言できない事象がある。時間が過去・現在・未来という一本の直線のように流れている時間感覚は民族によって異なるようである。B.L. Whorf (1941)は、アメリカインディアンの Hopi (ホピ語)の動詞には、私たちが考えるような過去・現在・未来という区別がなく、その代わりに i) 事実の報告、ii) これから起こることの期待、iii) いろいろなことについての一般論、の三つの区別によって形態的対立が示されるという。それゆえ、*He ran.* も *He is running.* もそれが事実の報告であれば同じ動詞の形で示されるという(『新英文法辞典』p.1045)。

01. I *visited* my grandmother last month.

(私は先月祖母を訪ねた。)

02. I often *visit* my grandmother.

(私はしばしば祖母を訪ねる。)

03. I *will visit* my grandmother next week.

(私は来週祖母を訪ねるつもりだ。)

01.は「過去の出来事」、02.は「現在の習慣的な行為」、03.は「未来の予定」を述べている。意味的に過去・現在・未来の三つの時間を感じとることができるが、ここで注意すべきことは、01.で使われている *visited* は過去形であり、02.で使われている *visit* は現在形であるが、03.で使われている *visit* は未来形ではない。英語の動詞に未来形というものはない。これは「*will*+動詞の原形」である。つまり、動詞の形態上からは未来形は存在しない。さらに *will* が必ずしも「未来」を意味するとは限らない、「意志」を表す場合もある。そのような理由から未来時制 (*future tense*)を認めないというのが現代の文法家の主流であるようだ。英語の時制として現在時制(*present tense*)と過去時制(*past tense*)の2時制を主張する文法家としては、Kruisinga (1925), Jespersen (1931), Leech (1971), Quirk et al. (1985), Greenbaum & Nelson (2002)らがいる。一方、迂言的な表現まで許容して未来時制 (*future tense*)を認める文法家もいる。Curme (1931), Comrie (1985), Declerck (2006)らがそうである。

Dr. Higgins's room

ギリシア語やラテン語の時制は動詞の屈折変化によって、現在時制・過去時制・未来時制が区別される。近世以降、英語の文法研究が盛んになり、その際に屈折の多くを失った英語の文法にラテン語の文法の規範をあてはめた。そのために、「will / shall+動詞の原形」を未来時制と考えることに影響を与えたと思われる。

Dr. Higgins's room

未来を表す表現の代表的な述部の形として次の5つの形式が考えられる。

- ① He *will leave* for America next week.
- ② He *is going to* leave for America next week.
- ③ He *is leaving* for America next week.
- ④ He *leaves* for America next week.
- ⑤ He *is to* leave for America next week.

これら5つの形式のうち、学校文法では、①の「will+動詞の原形」と、②の「be going to～」の形が未来を表す表現として教えられている。これら2つの形式は、他のものと比べて未来表現として用いられる頻度が圧倒的に高く、また、他の形式のように未来表現以上に重要な用法を持たないからである（「大修館英語学事典」p.500）。

ところで、学校文法では英語の時制は6あるいは12であると教えられている。時制を6とする考え方は、現在時制・過去時制・未来時制を基本時制とし、そのそれぞれに伴う完了相の、現在完了・過去完了・未来完了をあわせた6つとするものである。また、時制を12とする場合は、この6つのそれぞれに進行形をつけた合計12とするものである。しかしながら、「完了形」や「進行形」は時を表すものではなく、動作の様態を表すものであるので時制の範疇に入れるのには少し問題がある。「完了形」と「進行形」は「相」という文法範疇に属するものである。

(02) 現在時制の用法

① 持続的な状態を表す

have, know, live, like, think などの状態動詞は「持続的な状態」を表す。

04. He **has** a lot of money.

(彼は大金を持っています。)

05. My parents **live** near Dover.

(両親はドーバーの近くに住んでいます。)

— Swan (2005³)

② 習慣的または反復的動作を表す

get up, go, come などの非状態動詞は「習慣的または反復的動作」を表す。

06. My mother **gets up** at six every morning.

(母は毎朝6時に起きます。)

07. My brother **goes** to school by bike.

(兄は自転車通学です。)

③ 一般的事実や真理を表す

状態動詞、非状態動詞に関わらず、時間を超えた「真理や事実」を表す。

08. Water **consists of** hydrogen and oxygen.

(水は水素と酸素からできている。)

09. The earth **moves** round the sun.

(地球は太陽の周りをまわっている。)

10. All **roads** lead to Rome.

(全ての道はローマに通ずる。)

④ 眼前の出来事や進行を表す

スポーツなどの実況放送、実験、実演など眼前の行為について、その行為の過程を順次説明する。小説・演劇・映画のプロット、戯曲のト書きなどでも使われる。

11. Smith **passes** to Devaney, Devaney to Barnes, Barnes to Lucas — and Harris **intercepts**... Harris to Simms, nice ball — and Simms **shoots!** — Swan (2016⁴)

(スミスがデバニーにパス、デバニーはバーンズに、バーンズはルーカスにパスをした。ハリスがインターセプト…ハリスがシムズにパス、ナイスパス、シムズがシュート！)

12. First I **put** a lump of butter into a frying pan and **light** the gas; then while the butter's melting I **break** three eggs into a bowl, like this... — Swan (2016⁴)

(最初にバター一塊をフライパンに入れて、ガスに火をつけます。そしてバターが溶けている間に卵を3個割って、このようにボウルに入れます。)

13. When the curtain *rises*, Juliet *is sitting* at her desk. Suddenly the window *opens* and a masked man *enters*. — Tomson and Martinet (1986⁴)

(幕が上がるとジュリエットが机の前に座っている。突然窓が開き、覆面をした男が入ってくる。)

14. Here *comes* the train! Pick up your suitcase. — 江川 (1991³)

(さあ、電車が来たよ。スーツケースを持ちなさい)

15. There *goes* the bus; we'll have to wait for the next bus. — 江川 (1991³)

(ほら、バスが出て行くよ。次のバスまで待たなければなるまい)

16. There's your host; you'd better make yourself known to him. — 江川 (1991³)

(ほら、あそこにホストがいる。君は自己紹介をしておくほうがいいだろう)

Dr. Higgins's room

11.の英文は、Swan (2016⁴)からの引用である。それによるとスポーツの実況放送において、サッカーのような素早い動きでは現在時制が用いられる傾向が強く、ボートのようなゆっくりとした動きでは進行相が用いられやすいという。

Oxford *are pulling* slightly ahead of Cambridge now; they're *rowing* with a beautiful rhythm; Cambridge *are looking* a little disorganized... — Swan (2016⁴)

(今度はオックスフォードがケンブリッジを僅かに追い越しました。見事なリズムで漕いでいます。ケンブリッジは少し乱れがでてきました。)

また、同書によると現在時制は次々に起こる事柄について使うことが多く、進行相は物語の「背景」、つまり、話が始まったときには既に起こっていることを述べるのに使われるという。

So I *open* the door, and I *look out* into the garden, and I *see* this man. He's *wearing* pyjamas and a policeman's helmet. 'Hello,' he *says*... — Swan (2016⁴)

(ここで私はドアを開け、庭を覗き込んだら、男がいた。彼はパジャマを着て、警官のヘルメットを被っていた。「やあ」と彼は言って…。)

There's this Scotsman, and he's *walking* through the jungle when he *meets* a gorilla. And the gorilla's *eating* a snake sandwich. So the Scotsman asks... — Swan (2016⁴)

(スコットランドの男がいてね。彼がジャングルを歩いていたら、ゴリラに出くわした。ゴリラはヘビのサンドイッチを食べていた。そこで、このスコットランドはこう尋ねた。)

14. 15. 16.は江川泰一郎「英文法解説」(1991, p.209)からの引用であるが、同書では、「現在時制の特殊な用法」の一つとして「here または there の先行する文」とあり、その説明では「ある人や物を見かけたとき、あるいは人の声や物の音を聞きつけたとき、その人や物に相手の注意を向ける表現である。文頭の Here や There に強勢が置かれ、感嘆文で表わされることがよくある」とある。そして、同書では、「眼前の動作」と区別されているが、このテキストでは、安藤貞夫「英語教師の文法研究」(1983, p.73)と同様に、「眼前の事実を感嘆的に指摘する」用法として考える。

⑤ 遂行動詞による行為の実現を表す

I play tennis. という文では、「私は(日常的に、或いは習慣的に)テニスをする」という意味で、発言すればその場でテニスをしているというわけではない。これに対し、I hereby declare the meeting closed. 「ここに閉会することを宣言します」という意味で、発言することがすなわち行為の遂行、つまり、「発話=行為の遂行」という関係が成り立っている。このような場合に現在時制が使われる。Austin (1962) によれば、この用法の特徴として、主語は一人称単数で、hereby と共起することが多い。主な遂行動詞として、accept, admit, advise, apologize, beg, bequeath, confess, declare, deny, name, pronounce, promise, resign, sentence, swear, warn などがある。

17. I hereby **declare** Tokyo Disneyland officially open.

(ここに東京ディズニーランドの開園を宣言します。)

18. We **apologize** for the late departure of this flight.

— OALD⁶

(当機の出発が遅れましたことをお詫び致します。)

19. I **pronounce** you man and wife.

— Palmer (1974)

(貴方がたを夫婦と公言致します。)

⑥ 歴史的現在

「歴史的現在」とはどういう現在なのか。研究社の『新英語学辞典』(1987)によれば、「過去の出来事をいま眼前で起こっているかのように、生き生きと叙述するために用いられる現在時制の一用法」とある。Jespersen (1931, p.19) は、— the speaker, as it were, forgets all about time and imagines, or recalls, what he is recounting, as vividly as if it were now present before his eyes. (語り部は、いわば、時間の枠外に踏出し、自分が語っていることを、あたかも今目の前で繰り広げられているかのように生き生きとして叙述している)ので、むしろ「劇的現在(dramatic present)」と呼ぶべきだと言っている。「歴史的現在」は眼前で繰り広げられているかのような効果を持っていることから、④の「眼前の出来事や進行を表す」用法の亜種とも考えられる。又、この用法は、日常会話でも見られる用法であるが、文学作品の中に多くの例を見出すことができる。日常会話でこの用法が用いられるときは、21.22.のように過去時制で始めた会話の途中から切り替わることが多い。

20. Soon there **is** a crowd around the little prostrate form, the latest victim of reckless speeding. A strong man **holds** the little fellow in his arms. The crowd **makes** room for a little woman who **cries** out, “Give me my boy!”

— Curme (1931)

(やがてその打ちひしがれた子ども—無謀なスピードの犠牲者—の周りに群集ができる。一人の屈強な男がその子を腕に抱えあげる。群衆は「私の坊やを返して！」と叫ぶ女性のために道をあける。)

21. I was just falling asleep in bed when my wife **rushes** in shouting that the house next door **is** on fire.

— 江川 (1991³)

(私が寢床に就こうとしていると、妻が飛び込んできて、隣家が火事だと叫ぶのです。)

22. **I was just about to go to bed when all of a sudden there's a knock at the door and Sam rushes in.** — 柏野 (1999)

(私が寢床に就こうとしていると、突然ドアをノックする音がし、サムが飛び入ってきた。)

⑦ 年代記の現在

Curme (1931) によれば、歴史的事実を現在の関心事として記録するのに現在形を使う用法がある。これを「年代記の現在(annalistic present)」という。「歴史的現在」の用法と似ているが、歴史的現在のねらいが、「あたかも目の前で繰り広げられているかのような効果」であるのに対し、「年代記の現在」のねらいは、「過去の事実に対しての現在時における妥当性」であると言える。歴史年表、新聞の見出し、写真のキャプションなどで用いられている。

23. **It is not till the close of the Old English period that Scandinavian words appear. Even Late Northumbrian (of about 970) is entirely free from Scandinavian influence... With the accession of Edward the Confessor in 1042 Norman influence begins.**

(古代英語期の終わり頃になって初めてスカンジナビア語が現れる。およそ 970 年頃の後期ノーサンブリア方言でさえまだスカンジナビア語の影響は受けていないが・・・、西暦 1042 年のエドワード証聖王の即位とともにノルマン語の影響が始まる。)

— Sweet, *New English Grammar*, I, p.216

⑧ 伝達動詞の現在形

過去において伝達された情報に言及するときに現在時制を用いる。この用法も「過去の事実に対しての現在時における妥当性」について関心が払われている用法である。それゆえ、過去－現在の繋がりを感じる現在完了相の同義的用法とも言える。この用法で用いられる動詞は主に、say, tell, write, learn, hear, see, etc.の伝達動詞である。また、過去の作家の言葉が現代においても有効だと感じて引用するとき用いられる say などともこれと同じ用法である。

24. **The ten o'clock news says that it's going to be cold.** — Leech (1971)

(10 時のニュースによるとこれから寒くなるとのことだ。)

25. **I hear Mrs. Baxter has lost her cat.** — Leech (1971)

(バクスター夫人は猫をなくしたそうですね。)

26. **I learn that you are going to sell your house.** — Curme (1931)

(あなたが家を売るつもりだと知っていますよ。)

27. **John writes to say that he can't visit us this week.** — Hornby (1975²)

(あなたが家を売るつもりだと知っていますよ。)

28. **My friends tell me that you've been unwell.** — Hornby (1975²)

(僕の友達が、君がずっと具合が悪いことを教えてくれた。)

come, bring は情報の伝達を表わす動詞ではないが、人や物が移動するという意味では一種の伝達動詞とみなされるのだろうか、上の伝達動詞と同じような用法が見られる。しかしながら、出身を尋ねる場合の come は別として、come, bring については現在完了相で表現する方が普通である。

29. Where do you *come* from?

(どちらから来られましたか。)

30. I will tell you what *brings* me, I think I can answer for your being glad to hear it.

(何用で参ったか申しませう。それを聞くとあなたが喜ぶことは間違いありません。)

— *Dickens, Martin Chuzzlewit*

⑧ 確定的な未来の予定を表す

英語はその音韻的、形態的、語彙的などの特徴から3つの時代に区分されている。つまり、西暦600年頃～西暦1150頃の古代英語期、西暦1150年頃～西暦1500年頃の中世英語期、西暦1500年頃以降の現代英語期の3区分である。古代英語期においては、すでに shall や will は存在していたが、shall は「義務」の意味が強く、will は「意志」の意味が強かった。そこで、現在時制が現在の他に未来を表わすときにも用いられていた。中世英語期になると、shall と will は次第に未来を表す手段として用いられるようになるが、最初のうちは will よりも shall の方がよく用いられていた。しかしまだ両語とも人称による区別は存在していなかった。現代英語期になって shall と will は人称による使い分けがされるようになった。このような歴史的経緯からして、現代において現在時制が未来を表す用法を持っていることは極めて自然なことである。さて、この現在時制が未来の予定を表す用法について、「その予定が変更不可能な確定的な予定を表す場合」に用いられる用法であると言われている。具体的には、カレンダー、スケジュール、プログラム、時刻表などで用いられる表現である。その最も代表的な例として、江川(1991, p.224)は次の 31. を挙げている。

31. Next Christmas *falls* on a Tuesday.

— 江川 (1991³)

(次のクリスマスは火曜日にあたります。)

32. According to schedule I *leave* at seven in the morning.

— Close (1981³)

(スケジュールによると、朝7時の出発です。)

33. The concert *begins* at 7.30 and *ends* at 9.30.

— Alexander (1988)

(コンサートは7時30分に始まり9時30分に終わる。)

34. The ship *leaves* at six o'clock tomorrow morning.

— Close (1975)

(船は明朝6時に出航します。)

安藤(1983)によると、このように現在時制が備えている「実現の確実性」は今後の〈段取り〉や〈脅迫〉にも利用される。相手の指示を仰ぐ〈段取り〉で用いられる場合は、疑問文で、主語は I か we に限られる。

35. What do I do now / then?

— 安藤 (1983)

(これから / それからどうするのですか?)

36. One more step, and I SHOOT you!

— Leech (2004³)

(一歩でも動いたら命はないぞ)

⑩ 時や条件を表す副詞節で用いられる用法

高校生用のたいていの英文法書には、「時や条件を表す副詞節内では、未来のことを言及する場合でも現在時制を用いる」とある。しかしながら、その理由は詳説されていない。いわばルールとして扱われている印象がある。例えば、「明日雨が降れば、試合は中止されるだろう。」という文は **37.** のようになる。

37. If it rains tomorrow, the game will be cancelled.

(もし明日雨が降れば、試合は中止されるだろう。)

このような場合に現在時制が用いられる理由については、いろいろな文法家が諸説を提示している。だからこそ学校文法ではルールとして覚えるべきものとして扱われているのだと思われるが、このことについて少し詳しくみてみたい。Jespersen のような伝統的文法家たちはその理由として、未来のことについて述べていることは主節の動詞によってすでに明らかなので、わざわざ will を使う必要がないと説明した。そして、もしそのような節内で will が用いられれば、その will は意志の will であるとした。これに対し、Allen (1966) は、従節には「主節に拘束される従節」と「主節に拘束されない従節」があるといい、前者を『拘束節』、後者を『自由節』と名づけた。そして、主節に拘束される拘束節内では will は生じないが、主節に拘束されない自由節では will は生じると説明したが、それらの明確な定義までは提示しなかった。そして、副詞節を導く接続詞は次のように《拘束節のみを導く接続詞》・《自由節のみを導く接続詞》・《拘束節も自由節も導く接続詞》の三つに分類できるとした。このようにして、Allen は if 節を拘束節とみなし、will は生じないと主張したが、その後、Palmer (1974), Close (1980), Comrie (1985)らが Allen の説に異を唱えた。その中でも Close (1980)の「予測可能性説」が最も説得力があるので詳しくみていくことにする。

拘束節のみを導く接続詞	when, after, before, if
自由節のみを導く接続詞	although
両方の節を導く接続詞	because

Close(1980)は1977年4月に起きたノルウェーのエコフィスク油田石油流出事故時のノルウェー首相の発言 38.を提示して、首相の発言としては至極当然のものであると述べ、もしこれが 39. のように if 節に現在時制が用いられていたなら、油が沿岸に達して被害が出た後に対策をすることになるので無責任な発言となると説明した。

38. If the slick *will come* as far as Stavanger, then of course I must take precautions on a massive scale. — Close (1980)

(油がスタバングル市まで流れ着きそうなら、その時はもちろん大規模な安全策を講じなければならない。)

39. If the slick *comes* as far as Stavanger, then of course I must take precautions on a massive scale.

(油がスタバングル市まで流れ着いたら、その時はもちろん大規模な安全策を講じなければならない。)

Closeによれば、条件節に予測可能性(assumed predictability)が認められれば、if 節の動詞の形は《will+動詞の原形》になるという。同じような説明を Mark Petersen もその著書『続日本人の英語』(1988)の中で述べている。同氏によると、40. と 41.の違いは意味の違いであって文法的にどちらが正しいかというようなことではないという。

40. If I *am* late, I will call you. — Mark Petersen (1988)

(遅れてしまったら、そのときは電話します。)

41. If I *will be* late, I will call you. — Mark Petersen (1988)

(遅れるような状況になったら、そのときは電話します。)

40. と 41. を日本語で言えば、両方とも「遅れたら電話します。」となりそうだが、前者は「遅れてしまったらそのときはあなたに電話します。」という意味で、後者は「もし遅れるような状況になったら念のためあなたに電話します。」というような意味である。Mark Petersen 氏は上記の著作の中で、この二つの発言の状況説明を次のように述べられている。40.の発言は「もし、最終電車に間に合わなかった場合、友だちに駅まで迎えに来てもらって、そして家まで送ってもらえるように電話する」ケースであり、41.の発言は「今晚7時に彼女に会う約束をしているが、もしかすると今日新しい仕事が入ってくるかもしれない、その場合、約束の時間に間に合うはずがないので、その仕事が入ってきた時点で、“ちょっと遅れるから”と彼女に電話しておく」ケースであるという。前者は「遅れるという状態がすでに完了してしまっている」のに対し、後者は「まだ遅れるという状態には至っていない」ということである。

また if 節に will を使用すると、42.のように「意志」を表すことが多いが、Leech(2004³)によれば 43.のように「中立的な予言」を表すこともあるという。そして、その場合は if 節の内容は未来時点ではなく発話時点での判断を下すという。44.は「もしお正月になって一人いるようなことになっていれば、その時は教えてよ」という意味であるのに対し、43.は「お正月にひとりであることを今言明できるのなら、今教えてよ。」という意味になるという。ここで、注意すべきことは if 節に will が用いられていると、それは「意志」を表すことが多いが、「意志」でない will もあるということである。

42. **If you *will eat* so much, you can't complain if you get fat.** — 江川 (1991³)
(どうしてもそんなに食べるというなら、太っても文句は言えないよ。)
43. **If you *'ll be* alone at the New Year, just let us know about it.** — Leech (2004³)
(もしお正月にひとりであることを今言明できるのなら、今教えてよ。)
44. **If you *are* alone at the New Year, just let us know about it.** — Leech (2004³)
(もしお正月に一人でいることになっていけば、その時は教えてよ。)

以上のことから次の 45. と 46. を比べた場合、45. は容認されるが、46. はおかしい意味になってしまうので非文とみなされる。つまり、雨は降っていないのに、雨が降りそうだという理由でゲームは中止されてしまうことになるのである。

45. **If it *rains* tomorrow, the game will be cancelled.**

46. **If it *will rain* tomorrow, the game will be cancelled.**

つまり、if 節で *will* を用いれば、「発話時点での判断を下すことになる」から、主節の動詞をも発話時点における話し手の「意志」や「命令」や「依頼」などを表すような形になっていけば自然な表現になるというわけである。それゆえ、46. の主節を次のように変えれば矛盾のない英文になる。

47. **If it *will rain* tomorrow, we have to finish doing this work today.**

(もし雨が降るのなら、今日この仕事をやり終えなければならない。)

(03) 過去時制の用法

① 持続的な状態を表す

過去のある期間における状態、かなりの期間に渡る永続的な状態などを表す。用いられる動詞は状态的動詞 (be, have, know, live, think, etc.) である。

48. **He *was* in the army for two years.** — Tomson and Martinet (1986⁴)

(彼は2年間軍隊にいました。)

49. **He *lived* here all his life.** — Tomson and Martinet (1986⁴)

(彼は一生ここに住んでいました。)

Dr. Higgins's room

Leech(1971)は、see, hear, feelなどの知覚動詞は、can や could をつければ「知覚している状態」を表し、つかなければ「瞬間的な知覚」を表すという。

(a) I *could see* a bird. (私には鳥が見えていた。)

(b) I *saw* bird. (私には鳥が見えた。)

(c) I *could hear* a door slamming. (ドアがバタンバタンいっている音が聞こえていた。)

(d) I *heard* a door slam. (ドアのバタンという音が聞こえた。)

② 過去の一つの事件を表す

非状态的動詞 (get up, go, come, etc.) と共に用いられて、過去の動作を一つの事件または完結した事実として表す。ある期間持続した行為でも一つの事件として扱うので、期間を表す副詞語句と共に起できる。また、物語などで連続した事件を述べる場合にも用いられるので「説話の過去」(narrative past) と呼ばれることもある。

50. **I *got up* at seven thirty this morning.**

(私は今朝7時半に起きました。)

51. **I *met* him yesterday.**

(私は昨日彼に会いました。)

52. **He *worked* in that bank for four years.** — Tomson and Martinet (1986⁴)

(彼は4年間その銀行で働きました。)

53. **I *spent* all my childhood in Scotland.** — Swan (2016⁴)

(私は子供時代をずっとスコットランドで過ごしました。)

54. **One day the Princess *decided* that she didn't like staying at home all day, so she *told* her father that she wanted to get a job...** — Swan (2016⁴)

(ある日、王女は一日中家にいるのが嫌だと思い、父親に仕事に就きたいと訴えました。)

③ 過去の習慣的または反復的動作を表す

非状态的動詞(get up, go, come, etc.)は、②の「過去の一つの事件」を表す用法の他に「過去の習慣的または反復的動作」をも表す。この場合、通例、頻度や期間を表す副詞語句などによって反復であることが示されるが、場合によっては動詞の持つ特性や、複数形などの文法的要因などで示されることもある。

55. **He *always carried* an umbrella.** (always で反復が示されている) — Swan (2016⁴)
(彼はいつも傘を持って歩いていた。)
56. **He *often invited* me to dinner.** (often で反復が示されている) — 安井 (1996²)
(彼はよく私を夕食に招待してくれた。)
57. ***Whenever* he *went* abroad, he took his daughter with him.** (whenever で示されている)
(彼は外国へ行くときはいつも娘を連れて行った。) — 安井 (1996²)
58. **He *frequented* bars when young.** (動詞の意味と when 節で反復が示されている) — 安藤 (1983)
(彼は若い頃はよくバーに行った。)
59. **John *scored goals*.** (複数形によって反復とわかる) — 安藤 (1983)
(ジョンは何度かゴールを決めた。)
60. **Scottish Kings *were crowned* at Scone.** (複数形によって反復とわかる) — Onions (1929)
(スコットランド王は代々スコーンで即位した。)

Dr. Higgins's room

「過去の習慣的行為」は used to や would でも言い表せるが、両者には次のような相違点がある。

① used to は「以前は～した(が、今は～しない)」「以前は～であった(が、今は～でない)」という過去と現在の対比を表すのに対し、would は現在との対比的な意味はなく、過去の習慣的行為が現在おこなわれていないかどうかについては分からない。

(a) I *used to walk* to my office, but now I take the bus. — 江川 (1991³)

(以前は歩いて通勤していましたが、今はバスに乗ります。)

(b) I *used to like* John, but now I don't.

(以前はジョンのことが好きでしたが、今は違います。)

(c) There *used to be* a big pine tree in that park.

(昔あの公園には大きな松の木がありました。)

② ①の用法とは別に、過去において日常的に繰り返されたことを表す。現在との対比を意味することではなく、ある期間に渡って日常的に行為を繰り返していたことを述べる。この用法では would を使うこともできる。

(d) Tom and Ann were a young married couple. Every morning Tom *used to* kiss Ann and set off for work. Ann *used to* stand at the window and wave goodbye. In the evening she *used to* welcome him home and ask him to tell her about his day. — Tomson and Martinet (1986⁴)

(トムとアンは若い新婚でした。毎朝トムはアンにキスをしてから仕事に出かけた。アンは窓辺に立って手を振って見送った。夕方になり、彼女は夫を家に迎え入れると、その日にあったことを話してくれとせがんだ。)

Dr. Higgins's room

前ページからのつづき

③ *used to* が口語的であるのに対し、*would* は堅苦しい文語表現である。文語・口語に関わらず、話の冒頭では *used to* を用い、その後には *would* を使用する傾向がある。

(e) He *used to* have a day off once a week, and on that day he *would* get up early, have a hasty breakfast and set out for the river. — 江川 (1991³)

(彼は週に1回休暇を取っていたが、その日になると、早起きして急いで朝食を済ませ川へ出かけたものだ。)

(f) Sometimes he *used to* tell us of his expeditions through the woods and fields round his home, and how he explored the solitary brooks and ponds; and then he *would* describe the curious animals and birds he saw. — Sweet, *A Primer of Spoken English* (1932)

(時折彼は家の周りの森や原っぱに遠出して、静寂な小川や池を探索したことを話し手くれた。それからそこで見つけた珍しい小動物や小鳥のことを聞かせてくれた。)

④ *used to* はその中に *once* (かつて) という意味を内蔵しているので、通例は時を表す副詞語句は伴わない。しかし伴ったとしても容認されないということはない(Leech (2004))。一方、*would* が意味するのは過去の習慣的行為だけではないので、時の副詞語句や頻度を表す副詞、例えば *often*, *frequently*, *sometimes*, *always*, *for hours* などが必要である。

(h) He *used to* live here *during the war years*. — Leech (2004³)
(戦時中、彼はここに住んでいた。)

(i) There *used to* be a cinema here *before the war*. — Hornby (1975²)
(戦時前には、ここに映画館があった。)

(j) She *would often* come home tired out. — Hornby (1975²)
(彼女はよく疲れきって家へ帰ってくるがあった。)

(k) *Sometimes* the boys *would* play tricks on their elder brother. — Hornby (1975²)
(男の子たちは、ときどき兄さんたちにいたずらをするがあった。)

⑤ *used to* の表す過去は「期間限定のない過去」であるので、通例、期間を表わす副詞語句と共起することはできない。しかし、その期間が1回きりのことではなく、何回も繰り返されることで「習慣的行為」を作るのであれば、期間を表わす副詞語句と共起することができる(Leech, 2004³)。

(l) * I *used to* live in California *for two years*. — 綿貫 & Mark Petersen (2006)
(私はカリフォルニアに2年間住んでいました。)

(m) * She *used to* live in the green house *for ten years*, and then moved to the one on Mill Street.
(彼女は10年間緑の家に住んでいたが、その後ミルストリートの家に移った。)

(n) He *used to* go home *for several weeks* during the summer.
(彼は夏の間には数週間帰省した。)

Dr. Higgins's room

前ページからのつづき

used to は「動作動詞」「状態動詞」の両方とも結合するが、would は「動作動詞」とのみ用いられるとよく説明される。しかし、綿貫陽、Mark Petersen 共著『表現のための実践ロイヤル英文法』(p.93)には次のような記述がある。

日本では、過去の習慣を表わす **would** と **used to** との大きな違いとして、「used to とは違って、would は〔状態〕を示すことはできない」などのように教えられているようであるが、こうした大ざっぱな片づけ方は深い誤解を招きかねない。確かに最も単純な場合、たとえば、「前は、町の南部に住んでいた」というような場合であれば、**I used to live on the south side of town.**がちょうどよいのに対して、**I would live on south side of town.**とは言わない。ところが、これほど単純でない場合、とりわけ過去の中の「当該時期」がはっきり限定されている場合、たとえば「あの頃は、白人はたいてい町の南部に、黒人はたいてい北部に住んだりしていた」というようなことであれば、**Back then, the whites would generally live on the south side of town, and the blacks would generally live on the north side.**というように、**would** を使って表現することはごくふつうである。この現象は **believe** や **know**, **hate** など「通常は進行形にならない状態動詞」にもよく見られる。たとえば、「昔は椎茸が大嫌いだった」という単純な場合なら、**I used to hate shiitake.**と言い、**I would hate shiitake.**とは言わないが、これに対して、「私が子供のころ、母はよく椎茸を食事に出したりしていたが、私は大嫌いだった」というような場合であれば、**When I was a child, my mother would often give me shiitake, and I would hate it.**のように、**would** を使って表現するのふつうである。言うまでもなく、以上の2例は、**the whites generally lived [used to live] ...** や、**... gave [used to give] me..., ... I hated [used to hate] it.** などのように表現してもまったく差し支えないが、**would** を使うと、ただ単に「～していた」ではなく、前述の日本語対訳の「住んだりしていた」や「出したりしていた」のように、「～したりしていた」といった感じの文になるので、そうした感じを表したい場合に使うことは珍しくない。

④ 現在完了相の代用

話し手が「過去時制」と「現在完了」を使い分けする基準はどこにあるのか。それは話し手の過去の出来事に対する認識の仕方にある。つまり、話し手が、その出来事をもう過ぎてしまった事であり、話をしている時点と切り離された出来事と認識していれば過去時制を用いる。それに対して、話し手が、過去に起こった出来事ではあるが、話をしている時点と関わり合いを持っていると認識していれば現在完了を用いる。別の言い方をすれば、「過去と現在を結ぶ主観的距離感」とも言える。距離感を感じれば過去時制を用い、距離感を感じなければ現在完了を用いるのであろう。しかし、その距離感というものは主観的であるために、実際の現在からの距離の長短に比例するものではなく、ほんの今朝の出来事を過去時制で表し(例文 61.)、1週間前のことを現在完了で表わす(例文 62.)こともある。

61. My brother **bought** two hats **this morning**.

— Curme (1934)

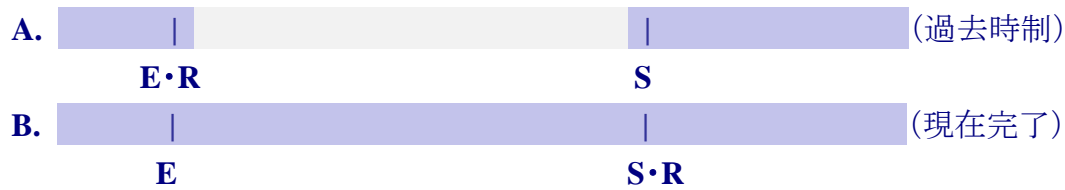
(兄は今朝帽子を二つ買った。)

62. My brother **has bought** two hats **this week**.

— Curme (1934)

(兄は今週帽子を二つ買った。)

Reichenbach(1947)に従って、時間軸に沿って、事件時(Event)・基準時(Reference)・発話時(Speech)を用い過去時制と現在完了をそれぞれイメージ化すると、次のようになる。



話し手が過去時制を選択するのは、イメージ図 **A.**のように、発話の際に事件時(=過去の特定時)に焦点(=基準時)を置いている。話し手にとって事件は過去の事件時の事であるため、その事件と発話時の話者の気持ちとの間には距離感が生まれる。この距離感があることは、例えば、現在とつながりの切れたと感じさせる特定の過去を表わす副詞語句 (*two years ago, in 1900, etc.*) を選択させ、その結果、動詞の形が過去時制に決定する。逆に、話し手が現在完了を選択するのは、イメージ図 **B.**のように、発話の際に発話時(=現在)に焦点(=基準時)を置いている。話し手にとって事件は現在でも何らかの影響を与えているため、話し手と事件との距離感はない。この距離感がないことが、特定の過去を表わす副詞語句を選択させず、その結果、動詞の形が過去時制ではなく現在完了に決定される。この時、現在完了と共起する副詞に **just, already, yet, recently** などがあるが、これらの副詞は現在完了と共起する副詞ではあるが、「ごく最近の過去を表わす副詞」でもあるため、話し手の意識を事件時の方へ引っ張りやすくなり、その結果、これらの副詞語句と共起する場合には、現在完了と過去時制の両方が認められている。

Dr. Higgins's room

Longman Advanced American Dictionary (LAAD²) の p.871 の **just** の項目に次のようにある。

Just, already, yet

In formal or written English, these words are usually used with the present perfect tense: *He's just gotten here.* | *I've already it.* | *Have you eaten yet?* However, in speech and less formal writing, we often use these words, especially **just**, with the simple past tense: *He just got here.* | *I already read it.* | *Did you eat?*

⑤ 過去完了相の代用

過去において二つの出来事が前後して起こった時、より古い方の出来事を表す動詞の形を過去完了相、より新しい方の出来事を表す動詞の形を過去時制で表して、その二つの出来事の前後関係を明示するのが普通であるが、用いられる接続詞や文脈などによって二つの出来事の前後関係に誤解を招く恐れがない場合には、両方の出来事の動詞の形とも過去時制で表現されることが可能である。そして、このように最初の出来事を過去時制で表現されると、時間関係よりも因果関係の方が重要視されていると説明する文法家が多い (Tomson and Martinet : p.177), (Swan : p.428), (Curme : p.361)。

63. When he *called* her a liar she *smacked* his face. — Tomson and Martinet (1986⁴)

(彼が彼女をうそつきと呼んだとき、彼女は彼の顔に平手打ちをくらわした。)

64. When I *opened* the window the cat *jumped* out. — Swan (2016⁴)

(私が窓を開けたら、猫が飛びだした。)

65. John *was punished* because he *broke* a window. — Curme (1934)

(ジョンは窓を割ったので罰を受けた。)

一方、when 節に過去完了相を用いることによって、時間的間隔を強調することができる (Tomson and Martinet : p.177)。

66. When he *had shut* the window we *opened* the door of the cage. — Tomson and Martinet (1986⁴)

(彼が窓を閉めると、私たちは鳥かごの扉を開けた。)

67. When she *had sung* her song she *sat* down... — Tomson and Martinet (1986⁴)

(彼女は歌を歌うと、席についた。)

⑥ 婉曲・丁寧用法

日常的な会話でよく使われる用法で、過去時制の使用によって、今はそういう気持ちはないことを示し、遠まわしな間接的な言い回しになり、その結果、丁寧さを表すことになる。この用法でよく用いられる動詞として、hope, wonder, think, want などがある。過去進行相にすることによってさらに丁寧さを増すことができる (Leech: p.15), (Swan : p.429), (安藤: p.95)。

68. I *wondered* if you were free this evening. — Swan (2016⁴)

(今夕、お暇かと思ひまして。)

69. I *thought* you might like some flowers. — Swan (2016⁴)

(花が気に入られると思ひまして。)

70. *Did* you *want* cream with your coffee, sir? — Swan (2016⁴)

(珈琲にクリームをいかがでしょうか。)

71. I *was hoping* we could have dinner together. — Swan (2016⁴)

(夕食をご一緒にと思ひまして。)

⑦ 格言的過去

この用法は格言や諺などで見られることから、一般的には格言的過去 (gnomic preterite) と呼ばれているが、Jespersen(1931: p.74)は、総称的過去(generic preterite)という名称を与えている。そして同書には次のように説明されている。 — This is “a sort of stylistic trick to make the hearer himself draw the conclusion that what has hitherto been true is so still and will remain so to the end of time.” (これまで真実であった事は現在でもそうであるし、もちろん未来永劫そうであるという結論を聞き手自身に引き出させるべく一種の技巧である)。そして、「いつでもそうである(又はそうでない)」ということを示すために、ever, never が用いられる。

72. Faint heart never *won* fair lady. — 諺

(意気地なしが美女を手にいれたことはない。)

73. Men *were* deceivers ever. — *Shakespeare, Much Ado, II. iii. 65.*

(男はいつも食わせも者。)

■相

(01) 相とは何か

完了形や進行形を「時制」の一つとして考える学者もいるが、これらは時制の範疇に分類されるべきものというより、むしろ動作の様態を表すものである。大塚高信博士の「英語の Aspect に関する一試論」(『英文法論考』所収)という小論の中で、Mason と Bain の文法書から次のような tense(時制)の定義を引用されている。

Dr. Higgins's room

Tenses (Latin tempus, 'time') are varieties of form in verbs, or compound verbal phrases made with the help of auxiliary verbs, which indicate partly the time to which an action or event is referred and partly the completeness or incompleteness of the event at the time referred to.

Mason, C. P. *English Grammar*, London (1888) p.73.

Tense is the variation of the verb to express the time of an action, modified by the other circumstances of completeness and incompleteness.

Bain, A. *A Higher English Grammar*, London (1863) p.157.

Mason や Bain の文法書から tense(時制)を単なる時の表示と見るだけでなく、動作が完了しているか否かも tense の範疇に入れて考えているのがわかる。しかしながら、動作が完了しているか否かという事象は時を示すものではなく「動作の様態」である。このことを aspect(相)という。aspect というのはスラヴ語の文法用語 vid の英訳したもので、Sweet は tense-aspect と呼び、Poutsma は 'character of action' という名称を付けている。aspect はスラヴ語では動詞の語形変化で示される確立した文法範疇であるが、英語をはじめ他の言語では明確な文法範疇としては確立していない。英語において aspect が論じられるようになったのは 20 世紀後半以降である。Sweet, Jespersen, Poutsma, Curme らは動作の完了・未完了を tense として考えているが、Comrie (1976),(1985)は tense と aspect を次のように分けている。

Dr. Higgins's room

A system which relates entities to a reference point is termed a deictic system, and we can therefore say that tense is deictic. (By contrast, aspect is non—deictic, since discussion of the internal temporal constituency of a situation is quite independent of its relation to any other time point.)

Comrie, B. *Tense*, Cambridge (1985) p.14.

Aspects are different ways of viewing the internal temporal constituency of a situation.

Comrie, B. *Aspect*, Cambridge (1976) p.3.

Comrie によれば、**tense** とはある事象をある基準点(例えば発話時など)から相対的に見ることであるのに対し、**aspect** はある事象の時間的内部的構造のさまざまな眺め方のことであるという。つまり、**tense** は話し手がその動作が発話時から見て、過去・現在・未来という時間領域のいずれに属しているかを判断するものであるが、**aspect** というのは話し手の発話時とその動作の時間的關係性ではなく、話し手が自分の視点がある一時点に移し、そのある一時点においてある動作が終わったか、或いは進行中であるかなどを表すものである。それゆえ、進行形や完了形は **aspect** の範疇に入るものと考えられる。

ところで、日本語で「相」と言えば、普通は **aspect** のことを意味するが、「相」にはもうひとつ **aktionsart** のことを意味する場合がある。**aspect** が動詞の語形変化で表す「文法的アスペクト」を表すのに対し、**aktionsart** は個々の動詞に内在する「語彙的アスペクト」を意味する。一般的に、日本語で「相」という場合は、**aspect** のことを意味しており、**aktionsart** はそれと区別するために「語彙的アスペクト」、「語相」などと呼ばれる。**aspect** と **aktionsart** との区別の研究は Deutshbein (1916), Deutshbein & Klitscher (1959) らによって始まった。そして、**aktionsart** の研究は Vendler (1967) の動詞の分類の研究などによって発展したといえる。

(02) Vendler の動詞の分類

aspect を論じる場合、単に完了相か進行相かという文法的アスペクトだけでは不十分であり、個々の動詞の持つ特徴も考えなければならない。アメリカの哲学者 Vendler が動詞をその時間的概念の特徴によって分類している。

動詞の4分類		時間的概念の特徴
進行形を作れる	活動動詞	terminal point (終着点) がない。
	達成動詞	terminal point (終着点) がある。
進行形を作れない	到達動詞	terminal point (終着点) がある。 一瞬にして起こって終わる
	状態動詞	ある期間に渡って続く

- 74. **He is pushing a cart.** (活動動詞)
- 75. **He is running.** (活動動詞)
- 76. **He is drawing a circle.** (達成動詞)
- 77. **He is running a mile.** (達成動詞)
- 78. **He reached the top at noon sharp.** (到達動詞)
- 79. **He spotted the plane at 10:53 A.M.** (到達動詞) (瞬間動詞) ?
- 80. **He loved her for three years.** (状態動詞)
- 81. **He believed in the stork till he was seven.** (状態動詞)

Vendler は先ず動詞を、**What are you doing?** という疑問文に対して、進行形で答えることができるか否かで動詞を2つに分けた。そして進行形を作れるグループは終着点(**terminal point**)を持っているか否かでさらに2つに分けた。終着点とは行為成就のための目標点である。例えば、**74.** や **75.** で行為が中断されたとしても、実際に「カートを押した」のであり、「走った」のであるから、行為が成就されなかったとは言えない。しかし、**76.** や **77.** において行為が中断されたとすると、実際には「円を描いた」とか「1マイル走った」とは言えない。つまり行為は成就されなかったのである。**74.** や **75.** のように終着点を必要としない動詞を活動動詞(**activity terms**)と呼び、**76.** や **77.** のように終着点を必要とする動詞を達成動詞(**accomplishment terms**)と命名している。活動動詞と達成動詞の識別は、次の2通りの疑問文によってテストできる。活動動詞は無制限に継続可能な動詞であるため、行為の継続時間を尋ねる**(a)**のような **For how long~?** の疑問文に答えることができる。一方、達成動詞は終着点のある動詞であるため、行為が完了するまでの必要時間を尋ねる**(b)** のような **How long~?** の疑問文に答えることができる動詞である。

(a) For how long did he push the cart?

(b) How long did it take to draw the circle?

一方、進行形を作れないグループの方も終着点(**terminal point**)を持っているか否かで2つに分けられる。例えば、**78.** や **79.** で用いられている **reach, spot** などの動詞は行為を成し遂げる上で明確な一瞬の時(**at a definite moment**)が必要である。Vendler はこのような動詞を到達動詞(**achievement terms**)と命名している。それに対して、**80.** や **81.** で用いられている動詞は短期間又は長期間に渡っての主語の状態を表す状態動詞(**state terms**)である。到達動詞は次の**(c),(d)**の疑問文によってテストできる。状態動詞はある期間に渡って状態が継続する動詞なので、**(e) For how long~?** **(f) How long~?**のどちらの疑問文にも答えることができる。

(c) At what time did you reach the top?

— **At noon sharp.**

(d) At what moment did you spot the plane?

— **At 10:53 A.M.**

(e) For how long did you love her?

— **For three years.**

(f) How long did you believe in the stork?

— **Till I was seven.**

達成動詞のテスト文である **How long did it take ~?** とそれに対する返答文 **It took ~ to...** は到達動詞でも共起が可能である。しかし、達成動詞と共起する場合には行為が達成されるまでの必要時間を表すのに対し、到達動詞と共起する場合には出来事が生起するまでの所要時間を表す。

82. How long did it take to draw the circle?

— **It took him twenty seconds to draw the circle.** (達成動詞)

83. How long did it take to reach the summit?

— **It took him three hours to reach the summit.** (到達動詞)

(03) 進行相 (=進行形)

① その名称について

「be 動詞＋現在分詞」の形は、学校文法では、「進行形」と呼ばれている。これは Curme や Kruisinga の Progressive Form の邦訳名称だと思われる。学者によってその名称は十人十色で、Jespersen は Expanded Tense (拡充時制) と呼び、Poutsma は Expanded Forms (拡充形) と呼んでいる。Leech, Quirk et al, Chomsky らは Progressive Aspect (進行相) と呼んでいる。ここでは Leech らに従って Progressive Aspect (進行相) と呼ぶ。

② 歴史的概説

現代英語の進行相 (=進行形) が確立したのは 18 世紀初頭であると言われている。Modern English (1500 年以降) 期に入った頃は、まだ進行相 (=進行形) は確立しておらず、単純時制が進行相 (=進行形) の機能も担っていた。Shakespeare (1564～1616) も Hamlet (1601) の中で Polonius に “What do you read, my Lord” という単純時制を用いて進行相 (=進行形) の意味を表わしている。

進行相 (=進行形) の成立過程については、実はまだ明らかにされていない。ひとつの起源説として、Old English (700 年～1150 年頃) の「bēon/wesan＋～ende」「bēon/wesan＋～inde」「bēon/wesan＋～and(e)」(bēon/wesan は be 動詞。-ende は中部で、-inde は南部で、-and(e) は北部でそれぞれ用いられた現在分詞の接辞) が挙げられる。この構文はラテン語の形式所相動詞 (Deponent verb : 受動態の語尾形態を持つが能動態の意味をもつもの、例えば、moror (=I delay)、hortor (=I urge)、moriō (=I die) など) を OE に訳すときに用いられた。それゆえ、ラテン語の影響の少ない文献からは多くを探し出すことは困難であるようである。例えば、8 世紀頃にウェスト＝サクソン方言 (OE 期の標準語) で書かれた OE 最大の叙事詩 Beowulf (『バイオウルフ』) には 3,182 行中わずか 3 例しか見当たらない。機能面においても現代英語の進行相 (=進行形) のように「時間の継続」を必ずしも表わしていたわけではなく、単純時制との区別は文体的な差であり、「be 動詞＋形容詞」のようなものであったと理解されている。この構文は OE 期から ME 期にかけて存在はしていたものの盛んに用いられるものではなかった。ME 期に中部の -ende と南部の -inde は -ing に統一されるが、北部やスコットランドで用いられていた -and(e) はそのままその形を長い間残すことになる。

もう一つの起源説は、OE 期の「bēon/wesan＋on＋～ung」「bēon/wesan＋on＋～ing」(bēon/wesan は be 動詞。-ung や -ing は元来名詞に付けて抽象名詞を形成する接辞であったが、やがて -ung や -ing を取り除いたものを動詞として意識するようになり、その結果、-ung や -ing を動詞に付けて名詞を形成する接尾辞として用いるようになったという) 説である。この抽象名詞は on/in/at など前置いて、例えば、He is on hunting. (= He is in the course of hunting. / = He is engaged in hunting.) のように使われていたが、やがて、on[on] > an[ən] > a[ə] > Ø のように消失したと推測されている。消失の途上で生まれた「be＋a＋～ing」の形は今日でも俗語や方言で見ることができる。ME 期の間

に-ung 形が消失し-ing 形一つにまとめられると、現在分詞を起源とする〈be+~ing〉と抽象名詞を起源とする〈be+~ing〉の区別がつかなくなった。また、on などの前置詞が付かなくなると、always や all day のような副詞と一緒に使われることが多くなり、徐々に進行相(=進行形)の体裁を整えていったというものである。いずれにせよ、どちらか一方を進行相(=進行形)の起源に決定してしまうのは難しいように思われる。二つの構文が互いに影響して現代の進行相(=進行形)が成立したものだと思われる。

(04) 現在進行相の用法

① 現に進行中の動作を表す

84. **It *is raining*.** — Tomson and Martinet (1986⁴)

(今雨が降っています。)

85. **What *is* the baby *doing*?** — Tomson and Martinet (1986⁴)

(赤ちゃんは何をしていますか。)

86. **‘Where’s Joan?’ ‘*She’s cooking* the dinner.’** — Leech (2004³)

(ジョアンはどこにいるの? 彼女は夕食を作っているよ。)

② 継続中の出来事を表す

単純現在時制が「永続的な習慣」を表すのに対し、現在進行相が「一時的な習慣」を表すことがある。

87. **George *is getting up* five o’clock every day this week to prepare for his examination.** — Close (1975)

(ジョージはテスト勉強のため今週は5時に起きています。)

88. **Jack *is walking* to school this semester** — 江川 (1991³)

(ジャックは、今学期は歩いて通学している。)

89. **I understand you *’re taking* music lessons every week.** — 江川 (1991³)

([このごろ] 君は毎週音楽のレッスンを受けているそうだね。)

Dr. Higgins’s room

次の二文を比べられたい。

(a) He *makes* \$800 a week. (彼は週に800ドル稼いでいる。)

(b) He *is making* \$800 this week. (彼は今週800ドル稼いでいる。)

(a)は彼のいつもの給料の金額を言っているのに対して、(b)は今週彼が稼いだ金額を言っている。このような意味の違いは(c)と(d)でも言えることで、(c)は彼の住所を言っているのに対し、(d)は彼が今一時的に住んでいる場所を言っていることになる。

(c) He *lives* at Oxford.

(d) He *is living* at Oxford.

③ 行為解説の用法

「A という行為をすることが B という行為をすることになる」ということを表す用法で、「行為解説の進行形」とか「同一性を示す用法」などと呼ばれる。A の部分には if 節、when 節、前置詞句などさまざまな形が見られる。

90. **But you know, when you ask me to get my wife, to whom I'm very much attached, to divorce me, and ruin my career by marrying you, you're asking a good deal.** — Maugham, *The Painted Veil*

(でもいいですか。愛している妻に私と離婚させ、あなたと結婚して私の人生を台無しにしてくださいと私に頼むことは、あなたはとんでもないことを頼んでいるのですよ。)

91. **Were you lying when you said that?** — Leech (2004³)

(ああ言ったのはうそだったのでしょうか。)

92. **In so doing he is defending his own position** — 安藤 (1983)

(そうすることによって、彼は自分の立場を弁護することになる。)

④ 動作が反復して行われていることを表す用法

Vendler による動詞分類によるところの到達動詞(一瞬にして動作が終わる動詞)は、Leech によってさらに瞬時的動詞(momentary verbs)と移行出来事動詞(transitional verbs)とに分けられている。このうち瞬時的動詞、例えば、hiccup (吃逆^{しやくぎやく}をする), hit (打つ), jump (跳ぶ), kick (蹴る), nod (頷く), sneeze (くしゃみをする), tap (軽く叩く), wink (ウインクする) などのような身体の動きを表す動詞が進行形で用いられると「行為の繰り返し」、つまり「反復動作」を表す。

93. **Someone is kicking the door!**

(誰かがドアを蹴っている。)

94. **The children are jumping for joy.**

(子どもたちは喜んで跳んでいる。)

95. **He is sneezing non-stop.**

(彼はひっきりなしにくしゃみばかりしている。)

⑤ 動作が完結に接近していることを表す用法

Leech (2004³)によれば、arrive (到着する), die (死ぬ), fall (落ちる), land (着陸する), leave (出発する), lose (失う), stop (止まる) などの移行出来事動詞(transitional verbs)が進行相(=進行形)で用いられると移行そのものというより「移行への接近」を表しているという。

96. **The bus is stopping.** — Leech (2004³)

(バスが止まろうとしている。)

97. **Coral is dying because of global warming, water pollution, erosion, and so on.**

(地球温暖化、水質汚濁、土壌浸食などのためにサンゴが死にかけている。)

— NHK 高校講座コミュニケーション英語Ⅱ, *A Microcosm in the sea*

98. **This train is arriving at Shin-Osaka station.**

(この電車はまもなく新大阪に到着します。)

⑥ 動作が段階的に変化していることを表す用法

Leech (2004³)によれば、change (変わる), develop (発達する), grow (なる), increase (増える), learn (学ぶ), mature (成長する), slow down (速度を落とす), widen (広がる)などの動詞を過程動詞 (process verbs) とよび、これらの動詞が進行相 (= 進行形) で用いられると「段階的变化」を表すという。Leech のこの過程動詞は Vendler の達成動詞 (事態の完了点に向かって変化していく動詞) に相当すると考えられる。

99. **The weather *is changing* for the better.** — Leech (2004³)
(天候は回復に向かっている。)
100. **The hospital *is developing* into an international center for cancer treatment.** — OLEX²
(その病院は癌治療の国際センターになりつつある。)
101. **The world itself *is growing* smaller and smaller.** — OLEX²
(世界そのものがますます小さくなっている。)
102. **Computer literacy *is increasing* in importance.** — OLEX²
(コンピューター運用能力の重要性が高まっている。)

⑦ ある行為が頻繁に繰り返されていることを表す用法

行為が頻繁に繰り返されていることを表すために、普通、always (いつも) や constantly (しょっちゅう), continually (四六時中), perpetually (年中絶え間なく), forever (しじゅう) 等の副詞を伴う。このとき、その繰り返される回数之多さに、話し手はしばしば迷惑を被っているとか、いらいらしているなどの気持を持っている。主語が一人称の場合は自分自身への苛立たしさを表している。

103. **He's *always giving* her expensive presents.** — Leech (2004³)
(彼はいつも彼女に高価なプレゼントをしている。)
104. **Tom *is always going* away for weekends.** — Tomson and Martinet (1986⁴)
(トムは週末になるとしょっちゅう遊びに出かけている。)
105. **He's *always scratching* himself in public.** — Swan (2016⁴)
(彼は人前でしょっちゅう身体を掻いている。)
106. **The car's *always breaking* down.** — Palmer (1987)
(その車はしょっちゅう故障する。)
107. **Her husband *is continually complaining* of being hard up.** — Hornby (1975²)
(彼女の夫は、年中金がないとこぼしている。)

この言い回しは、話し手の苛立ちや迷惑を表すのが普通であるが、そのような感情を伴わない場合もある。

108. He's *always doing* a good turn for someone.

— 安藤 (1983)

(彼はいつも誰かに親切にしてあげている。)

Dr. Higgins's room

この言い回しは一種の誇張表現であって、always などの副詞句は文字通りの「いつも」ではなくて「思っている以上に」「必要以上に」「しつこく」などのような意味合いとして用いられていると考えられる。単純現在時制で表せば文字通りの「いつも」の意味になる。

(a) Tom *is always going* away for weekends.

(トムは週末になるとしょっちゅう遊びに出かけている。)

(b) Tom *always goes* away for weekends.

(トムは週末ごとに遊びに出かけている。)

上のような違いは、always の意味解釈の違いから生じると思われる。always には‘on every occasion’ と‘continuously’の二つの意味があり、進行相(=進行形)で always を使うと‘continuously’になる傾向が強いと思われる。

⑧ 近接未来を表す用法

進行相(=進行形)は、計画・取決めによって予想される未来の事件を表す。元来は、この用法で用いられる動詞は、start(出発する), depart(出発する), arrive(到着する), come(来る), go(行く)のような往来発着を表す動詞であったが、現在では、bring(連れてくる), do(する), dine(食事をする), stay(滞在する), resign(辞する)などの予め計画できるような動詞にも使われる。

109. Martin *is coming* over for lunch on Sunday.

— Leech (2004³)

(マーチンは日曜日に昼食を食べにやってくる。)

110. She's *staying* over in London next Wednesday night.

— Leech (2004³)

(彼女は次の水曜日の夜、ロンドンに滞在予定です。)

111. I hear you're *moving* to a new job.

— Leech (2004³)

(新しい仕事に変わるんだって。)

112. I'm *meeting* Peter tonight. He *is taking* me to the theatre. — Tomson and Martinet (1986⁴)

(今晚ピーターに会う予定です。私を芝居に連れて行ってくれるのです。)

113. *Are you doing* anything tomorrow afternoon.

— Tomson and Martinet (1986⁴)

(明日の午後、何か予定ありますか。)

114. We're *going* to Dublin next week.

— Hornby (1975²)

(来週、私たちはダブリンへ行きます。)

Dr. Higgins's room

未来を表す基本形として、①will+原形、②be going to+原形、③単純現在形、④現在進行相の四つを挙げられるが、次のような相違点が見いだされる。

(a) 「I'll+原形」は、「話し手の意図」を表す表現であるが、その意図とは前もって考えられていた意図ではなくて、その場の状況に応じて生じた意図を表す。大げさな表現をすれば、「その時の決心」を表す表現である。例えば、レストランでメニューを見てステーキを注文するときなどには次のようにI'll…が用いられる。

BILL (to waiter) : *I'll have* a steak, please. —Tomson and Martinet (1986⁴)
(ビル [ボーイに] : ステーキにしてください。)

しかし、一旦決定した後に再びそのことに関して言及する場合には、I'llではなくて、be going toや現在進行相が用いられる。例えば、上の例文に続く場面で、ウェイターがまだ料理を出してこない間に、友人の TOM がやって来て同じテーブルについて、TOM が BILL に対して「何を食べるの？」と尋ねた場合、BILL はもうすでに注文した後なので、I'm going to…や現在進行相が使われる (Tomson and Martinet)。

TOM: What *are* you *going to* have?
(トム : 何を食べるの?)

BILL: I'm *having* / *going to* have a steak. 以上 —Tomson and Martinet (1986⁴)
(ビル : ステーキを食べるつもりです)

(b) 現在進行相の表す未来は、具体的な事前の約束や手配が済んでいることが前提となっている。例えば、次の例文では、私はボブと連絡をとって今日の午後出会うことを約束しているという意味である。これに対して be going to…を用いれば、Bob と会う約束まではしておらず、自分だけの気持でボブと会う約束をしているわけではない。

I'm *seeing* Bob this afternoon. —Hornby (1975²)
(私は今日の午後ボブと会うことにしている。)

I'm *going to see* Bob this afternoon.
(私は今日の午後ボブと会おうと思っている。)

Dr. Higgins's room

前ページからのつづき

(c) 単純現在形は、確定している未来の計画を表す。通例、未来を表す副詞語句を伴う。この語法は時刻表・カレンダー上の予定・定期的予定などを表す時によく用いられる。

The summer term *starts* on April 10th. —Swan (2016⁴)

(夏学期は4月10日に始まります。)

What time *does* the bus *arrive* in Seattle? —Swan (2016⁴)

(このバスは何時にシアトルに着きますか。)

Professor Black *retires* next year. —Hornby (1975²)

(ブラック教授は来年退職されます。)

We *have* dinner with Joe and Mary on Tuesday. —Hornby (1975²)

(私たちは火曜日にジョーとメアリーと会食することになっている。)

最後の例文は、We always have dinner with Joe and Mary on Tuesday. (いつも火曜日はジョーとメアリーと会食することになっている)とも解釈される可能性もあるので、未来に計画されている1回の出来事を示す場合には次のように現在進行相を用いると誤解されない。

We *are having* dinner with Joe and Mary on Tuesday.

(私たちは火曜日にジョーとメアリーと会食することになっている。)

⑨ 丁寧さを表す用法

hope (希望する), think (思う), want (欲する), wonder (思う) のような精神的状態を表す動詞を進行形で用いると、進行形のもつ未完了性という特徴のために、話し手の気持の不確定性を表すことになる。つまり、話し手の気持の変更可能性を表すことになり、その結果として、相手に対して遠慮がちで丁寧な表現になる。

115. I'm *hoping* you'll give us some advice. — Leech (2004³)

(少々アドバイスを頂きたいのですが。)

116. We're *wondering* if you have any suggestions. — Leech (2004³)

(何かご提案はおありでしょうか。)

117. I'm *hoping* you can lend me £10. — Swan (2016⁴)

(10ポンドほどお借りできないでしょうか。)

118. What time *are* you *planning* to arrive? — Swan (2016⁴)

(ご到着は何時ころになるご予定でしょうか。)

(05) 過去進行相の用法

過去進行相の用法は現在進行相の用法に準ずるが、過去進行相独自の用法もある。

① 過去のある時点における進行中の出来事を表す

過去のある時点は *then* や *in those days* などの副詞語句、*when* で始まる副詞節などで表すことが多い。また、副詞節に過去進行相が現れる場合もある。

119. He *was writing* when I entered the room.

(私が部屋に入った時、彼は手紙を書いていました。)

120. As I *was walking* down the road, I saw James.

— Swan (2016⁴)

(道路を歩いている時、私はジェイムズに会いました。)

121. The phone rang while I *was having* dinner.

— Swan (2016⁴)

(夕食を食べている最中に電話が鳴りました。)

② 継続中の出来事を表す

過去進行相も現在進行相と同様に、期間を限定する副詞句や副詞節を伴って「一時的な習慣」を表すことがある。

122. He *was taking* his children out for treats much oftener then.

— Hornby (1975²)

(その頃は、彼はもっと頻繁に子どもたちを連れだして楽しませてやっていた。)

123. I *was going* to work by bus in those days.

— Palmer (1974)

(当時はバスで通勤していました。)

③ 行為解説の用法

過去進行相にも「A という行為をすることが B という行為をすることになる」という意味を表わす「行為解説の用法」(p.23 参照)がある。A の部分には *if* 節、*when* 節、前置詞句などさまざまな形が見られる。

124. When Elizabeth put Ballard and Babington to death, she *was not persecuting*.

— Macaulay, *Essays*

(エリザベスがバラードとバビングトンを殺した時、彼女は迫害しているのではなかった。)

125. In giving him another chance I *was doing* a great favor for him.

— 江川 (1991³)

(彼にもう一度機会をやったのは、大いに配慮してやってのことだ。)

④ 動作が反復して行われていることを表す用法

主に身体の一瞬の動きを表す瞬時的動詞、すなわち、*hiccup* (吃逆^{しゅくぎやく}をする)、*hit* (打つ)、*jump* (跳ぶ)、*kick* (蹴る)、*nod* (頷く)、*sneeze* (くしゃみをする)、*tap* (軽く叩く)、*wink* (ウインクする) などが進行相で用いられると「行為の繰り返し」、つまり「反復動作」を表す。

126. He *was sneezing* non-stop.

(彼はひっきりなしにくしゃみをしていた。)

⑤ 動作が完結に接近していることを表す用法

Leech (2004³)によれば、arrive (到着する), die (死ぬ), fall (落ちる), land (着陸する), leave (出発する), lose (失う), stop (止まる)などの移行出来事動詞 (transitional verbs) が進行相で用いられると移行そのものというより「移行への接近」を表しているという。

127. Mother *was dying* in hospital.

— Leech (2004³)

(母は病院で亡くなりかけていた。)

128. Suddenly a helicopter *was landing* on the beach.

— Leech (2004³)

(突然、一機のヘリコプターが浜辺に着陸しかけていた。)

⑥ 動作が段階的に変化していることを表す用法

Leech (2004³)によれば、change (変わる), develop (発達する), grow (なる), increase (増える), learn (学ぶ), mature (成長する), slow down (速度を落とす), widen (広がる)などの動詞を過程動詞 (process verbs) とよび、これらの動詞が進行相で用いられると「段階的变化」を表すという。Leech のこの過程動詞は Vendler の達成動詞 (事態の完了点に向かって変化していく動詞) に相当すると考えられる。

129. It *was growing* darker.

— Leech (2004³)

(しだいに暗くなっていった。)

⑦ ある行為が頻繁に繰り返されていることを表す用法

行為が頻繁に繰り返されていることを表すために、普通、always (いつも) や constantly (しょっちゅう), continually (四六時中), perpetually (年中絶え間なく), forever (しじゅう) 等の副詞を伴う。このとき、その繰り返される回数多さに、話し手はしばしば迷惑を被っているとか、いらいらしているなどの気持を持っている。主語が一人称の場合は自分自身への苛立たしさを表している。

130. He *was always ringing* me up.

— Tomson and Martinet (1986⁴)

(彼はしょっちゅう私に電話をかけてきた。)

⑧ 近接未来を表す用法

現在進行相がごく近い未来における計画や取決めを表すように、過去進行相は過去から見た近い未来のはっきりした予定を表す。

131. He *was busy packing*, for he *was leaving* that night.

— Tomson and Martinet (1986⁴)

(彼は荷造りに忙しかった。というのはその夜出発する予定だったから。)

⑨ 背景描写の用法

小説の背景描写や場面描写によく過去進行相が用いられる。物語の進行は単純過去時制で述べられ、背景になる場面描写は過去進行相で描かれる。

- 132. A wood fire *was burning* on the hearth, and a cat *was sleeping* in front of it. A girl *was playing* the piano and *singing* softly to herself. Suddenly there was a knock on the door. The girl stopped playing. The cat woke up. — Tomson and Martinet (1986⁴)**

(いろりに薪の火が燃えており、その前で猫が眠っていた。少女がピアノを弾いて柔らかい声で歌を口ずさんでいた。突然、ドアをノックする音がした。少女は演奏をやめ、猫は眼を覚ました。)

⑩ スプリングボードフレーズを使う用法

小説の背景描写や場面描写によく過去進行形が用いられ、次々と起こる新しい事件には単純過去時制で描かれる。in a moment, next moment, soon, then, an hour later などの副詞語句の後に過去進行相を用いて、その前の瞬間との対照を強調する用法がある。「次の瞬間には…していた」と訳す。スプリングボードフレーズ (springboard phrase) とは Hatcher (1951)の用語で、in a moment や next time などの時を表す副詞語句のことをいう。この用法には決まった名称がつけられていないので Hatcher (1951)の用語を用いた。

- 133. the next moment she *was tapping* at her husband's dressing room. — Jespersen (1919-1949)**

(次の瞬間には彼女は夫の着替室のドアを叩いていた。)

- 134. Next minute they *were having* their first quarrel. — Jespersen (1919-1949)**

(次の瞬間には彼らは初めての口論をしていた。)

- 135. Three days later he *was having* tea with her at Claridge's. — Jespersen (1919-1949)**

(3日後には彼はクラリッジズホテルで彼女とお茶を飲んでいました。)

- 136. Then, suddenly, she *was clinging* to him, and his arms went about her. — Brusendorff (1930)**

(それから突然彼女は彼にかじりついていました。そして彼の腕は彼女を抱いた。)

- 137. An hour later they *were calmly fishing* as if nothing had happened. — Kruisinga (1931⁵)**

(1時間後には、彼らは何事もなかったように魚をとっていた。)

⑪ *was saying* の用法

過去進行相が伝達動詞とともに用いられると、次に続く動詞に、つまり、言われたことに対して大きな重要性があることを示唆する。

138. Jack *was saying* that he still can't find a job. — Swan (2016⁴)

(ジャックの話によるとまだ仕事が見つからないようだ。)

139. But, as I *was saying*, you must not think I have not suffered. — Wilde, *The Picture of Dorian Gray*

(しかし、さっきも言っていたように、私が苦しまなかったとあなたは思っははいけませんよ。)

140. As [OR Like] I *was saying*, we should give the issue more thought. — OLEX²

(前に申しましたように、この問題についてはもっと考えた方がいいです。)

⑫ 丁寧さを表す用法

hope (希望する), *think* (思う), *want* (欲する), *wonder* (思う) のような精神的状態を表す動詞を進行相で用いると、進行相のもつ未完了性という特徴のために、話し手の気持の不確定性を表すことになり、その結果、相手に対して遠慮がちで丁寧な表現になる。p.26 の⑨の「丁寧さを表す用法」をさらに丁寧にするために *be* 動詞を過去形にした言い方である。

141. What *were* you *wanting*? — Leech (2004³)

(何が入り用でしょうか。)

142. I *was just wondering* if you could give us some advice. — Leech (2004³)

(私たちに何か助言をいただけるかと思っていたのですが。)

143. Good morning. I *was wondering*: do you need help moving that stuff? — Swan (2016⁴)

(おはようございます。あのう、それを運ぶのにお手伝いはいりませんか。)

144. *Were* you *looking* for anything special? — Swan (2016⁴)

(何か特別なものをお探しでしょうか。)

145. I *was hoping* you could contact me. — 綿貫 & Mark Petersen (2006)

(ご連絡いただければありがたく存じます。)

(06) 完了相 (=完了形)

① その名称について

完了を表す形は伝統的に **Perfect tense** (完了時制) と呼ばれてきたが、すでに述べたように進行相と同じように時の区別を表すものではなく、動作が終わっているか続いているかの区別、つまり、**aspect** (相) を表すものであるので、ここでは **Perfect aspect** (完了相) という名称を使う。

② 歴史的概説

現在完了相 (=現在完了形) の「**have**+過去分詞」の形は OE 期の「**have**+目的語+過去分詞」の形に由来する。この **have** には強勢がなく、母音が落ちたり、脱落したりすることもあった。また、韻律の関係で動詞の位置が変わったり、目的語が前置されたりしているうちに、14 世紀頃には目的語の後にあった過去分詞が目的語と離れて **have** と密接な関係になり、「**have**+過去分詞」の形が出来上がった。OE 期では、自動詞のうちの「運動」や「変化」を表す **come, go, set, arrive, fall, enter, depart, become, arise, grow, change, die** などの過去分詞は **be** 動詞と結合していたが、やがて ME 期になって、**have** が本来の意味を失って助動詞的性格を発達させると、自動詞の過去分詞と結合していた **be** 動詞の座を奪い、自動詞の過去分詞とも結合するようになった。しかしながら、「**be** 動詞+過去分詞」の形は完全に消滅したわけではなく、その後も **come, go, set, arrive, fall, enter, depart, become, arise, grow, change, die** などの自動詞は **have** よりも **be** 動詞と結合して完了相を形成することの方が多かった。

(07) 現在完了相の本質的意味

話し手が過去に起こった出来事を何らかの点で「現在とのつながり」があると判断したときに現在完了相は用いられる。これに対して、過去時制は過去の出来事が「現在とのつながり」がないと判断された場合に用いられる。

146. Tom **has had** a bad car crash.

(トムはひどい衝突事故を起こしました。)

— Tomson and Martinet (1986⁴)

147. Tom **had** a bad car crash.

(トムはひどい衝突事故を起こしました。)

— Tomson and Martinet (1986⁴)

148. John Smith **has written** a number of short stories.

(ジョン=スミスは短編をいくつか書きました。)

— Tomson and Martinet (1986⁴)

149. John Smith **wrote** a number of short stories.

(ジョン=スミスは短編をいくつか書きました。)

— Tomson and Martinet (1986⁴)

「現在とのつながり」があるとは、例えば、「それで今入院中です」というような意味を含んでいるようなことであり、そういう場合には、**146.**のような現在完了相を用いる。これに対して、「今はもう退院して元気です」というような意味を表わすのであれば、「現在とのつながり」がないことになり、**147.**のように過去時制を使うことになる。

(08) 現在完了相の用法

① 結果を表す用法

現在の状態を過去の動作や状態の結果と考えていることを表わす。発話時において何らかの結果を残していることが特徴である。「～して、今は…だ」のような意味を持っている。go, come, leave, become, arrive, buy, sell, give, lose などの動詞は「結果」を表す傾向にある。

150. I've come to school without my glasses (so now I can't see to read). — Hornby (1975²)

(眼鏡を持たずに学校に来てしまった [それで今本が読めない].)

151. Jim has bought a car (so now he needn't use public transport). — Hornby (1975²)

(ジムは自動車を買った [それで今公共交通機関を利用する必要がない].)

152. Mr. White has gone to Burma (so now his place is empty). — Hornby (1975²)

(ホワイト氏はビルマに行った [それで今彼のいた席は空いている].)

153. I've recovered from my illness (I'm now well again). — Leech (2004³)

(私は病気から回復しました [それで今はもう元気です].)

② 完了を表す用法

ごく近い過去時に完結した動作を表わしたいときは、副詞の just を伴い現在完了相で表わす。「ちょうど～したところだ」「たった今～したところだ」などの定訳が使われる。

154. George has just gone out. — Hornby (1975²)

(ジョージはたった今出かけたところです。)

155. We've just finished breakfast. — Hornby (1975²)

(ちょうど朝食を終えたところです。)

156. It has just struck twelve. — Hornby (1975²)

(ちょうど12時を打ったところです。)

157. Brian has just rung up. — Hornby (1975²)

(ブライアンがたった今電話をかけてよこした。)

アメリカの口語表現では、この用法では現在完了相よりも過去時制が使われる傾向がある。例えば、154.は **George just went out.** となる。

Dr. Higgins's room

Thomson A.J. and A.V. Martinet, *A Practical English Grammar* (1986⁴) によると、時を明示しないで、近い過去の動作を現在完了相で表すことがあるという。さらに、このような現在完了の疑問文に対しては、現在完了はもちろんのこと、過去時制でも答えられるということである。

A: Have you had breakfast? (朝食は済ませましたか。)

— Yes, I have. (はい、済ませました)

— No, I haven't had it yet. (いいえ、まだです。)

— Yes, I had it at seven o'clock. (はい、7時に済ませました。)

— Yes, I had it with Mary. (はい、メアリーと一緒に食べました。)

③ 経験を表す用法

「結果」や「完了」用法が今現在とのつながりが強いのに対し、この用法では「今までに」という時間的には不定の過去時の出来事について述べるものである。もし、特定の過去時の出来事を表わすのであれば過去時制を用いるのが普通である。従って、この用法では時間を示す副詞語句よりも、経験の有無やその頻度を表わす副詞語句、例えば、*ever, never, once, before, often, sometimes, rarely* などと共起することになる。

158. **Have you *had* any serious illness?** — Hornby (1975²)

(重い病気にかかったことはありますか。)

159. **Have you ever *been* up in a balloon?** — Hornby (1975²)

(気球に乗って空に昇ったことはありますか。)

160. **I've never *known* her to lose her temper.** — Hornby (1975²)

(私は彼女が癩癩を起こしたということを知らない。)

161. **Have you *been* to Brazil?** — Leech (2004³)

(ブラジルに行ったことはありますか。)

162. **All my family *have had* injections against measles.** — Leech (2004³)

(家族は皆、はしかの予防接種を受けている。)

Dr. Higgins's room

Curme (1931:360) も現在完了が「不定の過去時」について述べ、過去時制が「特定の過去時」について用いられることを次のように説明している。

…The present perfect can be used of time past only where the person or the thing in question still exists and the idea of past time is not prominent, i.e., where the reference is general or indefinite: 'John *has been punished* many times' (general statement), but 'John was punished many times last year.' (definite). 'I have been in England twice' (indefinite time), but I was in England twice last year.'

一方、Leech (2004³)によれば、イギリスの英語では「特定の過去時」と現在完了が共起することはよくあると言う。

'Have you ever been to Austria?' 'Yes, I've *been* to Vienna *in 1980*.' — Leech (2004³)

④ 継続を表す用法

状態動詞が現在完了で用いられると「過去のある時から現在までの継続」を表わす。そして通例、その状態は未来まで続くことが含意されている。

163. I've lived in this neighbourhood since I was a kid. — Leech (2004³)

(私は子どものころからこの近くに住んでいます。)

164. We've known each other for years. — Leech (2004³)

(私たちは数年来の知り合いです。)

165. That house has been empty for ages. — Leech (2004³)

(あの家は長年空き家だ。)

状態動詞が現在完了で用いられると「継続」を意味するが、動作動詞が現在完了で用いられると、通例、「完了」を意味するので、動作動詞を「継続」の意味として用いる場合には、166.や167.のように‘for～’や‘since～’などの期間を表わす副詞語句との共起が必要となる。

166. He hasn't worked for years. — Tomson and Martinet (1986⁴)

(彼はここ何年も働いていない。)

167. My grandmother has played the piano since she was a little girl. — Tomson and Martinet (1986⁴)

(祖母は幼少のころからピアノを弾き続けている。)

しかし、write, reach, catch など、完結性の高い動詞は期間を表わす副詞語句との共起は矛盾するために非文となる。そこで、そういう場合には169.のように現在完了進行相を用いて、「継続」の意味を確実に表わすことで期間を表わす副詞語句の‘for～’との矛盾を解消しなければならない。

168. *He has written the book for two hours.

(彼は二時間その本を書いてしまった。)

169. He has been writing the book for two hours.

(彼は二時間の間その本を書き続けています。)

一方、expect, hope, learn, lie, look, rain, sleep, sit, snow, stand, stay, teach, wait, want, work などの動詞は、単なる完了相でも完了進行相でも継続の意味を表わせるが、単なる完了相で「継続」の意味を表わす場合には、期間を表わす副詞語句を伴わなければならない。

170. She has learned to play the piano since she was three years old. — 江川 (1991³)

(彼女は3歳のときからずっとピアノを習っています。)

171. She has been learning to play the piano since she was three years old. — 江川 (1991³)

(彼女は3歳のときからずっとピアノを習っています。)

(09) 現在完了進行相（現在完了進行形）の用法

前頁で述べたように動作動詞が現在完了で用いられると、通例、「完了」を意味する。それゆえ、動作動詞で「継続」の意味として表わしたいときには現在完了進行相を用いなければならない。

172. John *has painted* the door. 《完了》 — Hornby (1975²)

(ジョンはペンキを塗り終えた。)

173. Be careful! John *has been painting*. 《継続》 — Hornby (1975²)

(気をつけて。ジョンがペンキを塗っていたわよ。)

① ある事柄が過去時に始まり、現在もなお動作や状態が続いていることを示す用法

174. She *has been waiting* to see you since two o'clock. — Hornby (1975²)

(彼女はあなたにお目にかかりたいと2時からずっと待っています。)

175. They've *been studying* English for three years. — Hornby (1975²)

(彼らは3年間英語の勉強を続けています。)

176. It *has been raining* since early morning. — Hornby (1975²)

(早朝からずっと雨が降り続いています。)

② ついさっきまでやっていたことを示す用法

177. I don't feel like going out this evening. I've *been working* in the garden all day. — Hornby (1975²)

(今夜は外出したくないな。一日中庭で仕事をしていたので。)

178. Please excuse my dirty clothes. I've *been cleaning out* the garden shed. — Hornby (1975²)

(服が汚れていてすみません。庭の物置で大掃除をしていたものですから。)

179. He shouldn't drive this evening. He *has been drinking*. — 江川 (1991³)

(今夜は、彼は車の運転はよすべから。ずっと酒を飲んでいたので。)

Dr. Higgins's room

A S Hornby, *Guide to Patterns and Usage in English*, (1975) には次のような説明が書かれている。邦訳は伊藤健三訳注「第2版 英語の型と語法」(2.25)による。

The Present Perfect Progressive Tense usually indicates that the activity or state referred to still continues and may continue in the future. This tense is sometimes used, however, of an activity that is now ended. In such cases there is emphasis on the continuity of the activity or state. The continued and uninterrupted nature of the activity is often emphasized in this way as an explanation of or excuse for something.

現在完了進行時制は、ふつうその動作や状態がなお継続しており、未来にわたっても続くであろうということを表す。しかし、この時制は、いま終わったという動作についても用いられることがある。このような場合には、動作や状態が継続していたということが強調されているのである。動作が休みなくずっと続いていたということは、何らかの言いわけとして強調されるが、そのときこの現在完了進行時制がよく用いられるのである。

③ 反復行為を表す用法

180. People *have been phoning* me all day. — Swan (2016⁴)

(一日中電話がなりっぱなしだった。)

181. I've *been waking up* in the night a lot. I think I'll see the doctor. — Swan (2016⁴)

(最近夜中に何回も目が覚める。 医者に診てみてもらわねばと思う。)

182. I've *been knocking*. I don't think anybody's in. — Tomson and Martinet (1986⁴)

(ずっとノックしているのですが、中には誰もいないようだ。)

(10) 過去完了相 (過去完了形) の用法

① 現在完了相 (現在完了形) に準じる用法

過去のある時点を基準点にして、その時点までの「完了」・「結果」・「経験」・「継続」などを表わす。この基準点となるべき過去のある基準点は副詞的語句の場合もあるが、過去形の動詞によって示されることが多い。また、この基準点になる過去のある時点や過去の時期は明示されることが多いが、明示されない場合もある。

- 183. When I arrived Ann *had just left*.** — Tomson and Martinet (1986⁴)
(私が到着したとき、アンは出かけたばかりだった。)
- 184. On reaching the station, he found that his friends *had just arrived*.** — Hornby (1975²)
(彼が駅に着いてみると、友達はちょうど到着したところだった。)
- 185. His father *had gone to* America when he was born.** — 木村 (1967)
(彼が生まれた時には、彼の父親はアメリカへ行ってしまっていた。)
- 186. During our conversation, I realized that we *had met* before.** — Swan (2016⁴)
(話している間に、私たちは以前に会ったことがあるなと気づいた。)
- 187. She *had had* several proposals of marriage before she was twenty.** — 綿貫 (2002²)
(彼女は 20 歳になる前に、結婚の申し込みを数回受けたことがある。)
- 188. They *had been to* several parties during the Christmas holidays.** — Hornby (1975²)
(クリスマス休暇中に、彼らはいくつかのパーティに出席していた。)
- 189. I *had never been spoken to* in that way before.** — 江川 (1991³)
(それまでそういう口のきき方をされたことがなかった。)
- 190. I could recognize him at once, for I *had often seen* him before.** — 木村 (1967)
(それまで私はたびたび彼に会っていたので、彼のことがすぐにわかった。)
- 191. I could answer the question easily, for our teacher *had once told* us a story about it.** — 木村 (1967)
(私はその質問に容易く答えられた。先生がかつてそれについて話をしてくださったことがあったから。)
- 192. I knew the place very well, for I *had been* there several times.** — 木村 (1967)
(私はそこへ何度も行ったことがあったので、その場所をよく知っていた。)
- 193. Frank *had been* sick a week when the doctor came.** — 安井 (1996²)
(医者が来た時には、フランクはもう一週間も病気であった。)
- 194. When Ted came to the school in 1965, Mr. Robinson *had already been teaching* there for five years.** — Hornby (1975²)
(1965 年、テッドがその学校に来た時、ロビンソン先生はすでに 5 年間そこで教えていたのだ。)

② 大過去の用法

①の用法は過去のある時点を基準にしてその時点までの状態を表す用法であるが、別々の過去時に起こった二つの出来事を起こった順番どおりではなく、より新しい過去を先に表わす場合、より古い過去の出来事を過去完了で表わす。これを「大過去」、あるいは「過去の過去」・「先位過去」ともいう。

195. I gave a sigh of relief. The bear *had disappeared*. — 安藤(1983)

(私はほっと吐息をついた。熊が姿を消していたのだ。)

196. He would not eat any more. He *had had* his supper already. — 木村(1967)

(彼はそれ以上食べようとはしなかった。既に夕食を済ませていたのだ。)

197. The road was muddy. It *had been raining* all night. — 木村(1967)

(道がぬかっていた。一晩中雨が降っていたからだ。)

198. Mrs. Wilson was a widow. Her husband *had died* ten years before. — 江川(1991³)

(ウィルソン夫人は未亡人だった。10年前にご主人が亡くなっていたのです。)

別々の過去時に起こった二つ以上の出来事を、起こった順次に述べてゆく場合には、全て単純過去時制を用いて述べる。また、時間の前後関係が明らかな場合には、より昔の過去の出来事を過去完了で表わす必要はない。特に接続詞の *before* がある場合はどちらの出来事も過去時制で述べるのが普通である。

199. He *woke* at seven, *got* out of bed, *washed, shaved, dressed, went* downstairs, *had* breakfast, *put* his overcoat on, *hurried* to the bus stop, and *caught* a bus to the station. — Hornby (1975²)

(彼は7時に目を覚まし、床から起きて顔を洗い髭を剃り、身なりを整えて、階下へ降りて朝食をとり、コートを羽織ってバス停まで急ぎ、駅に行くバスに飛び込んだ。)

200. Tom's father *died* when Tom *was* eighteen. Before he *died* he *advised* Tom not to marry till he *was* 35, and Tom at 23 still *intended* to follow this advice. — Tomson and Martinet (1986⁴)

(トムの父親はトムが18歳の時に亡くなった。父親は死ぬ前にトムに35歳まで結婚はしない方がよいと言っていたが、その当時23歳だったトムはこの父親の言葉に従うつもりでいた。)

201. He *heard* both sides of the argument before he *made* a decision. — 江川(1991³)

(彼は裁定を下す前に両者の言い分を聞いた。)

195.~198.のように接続詞を用いず、時の前後関係を過去の文と過去完了の文だけで表わされることもあるが、*when, as soon as, till, before, after* などの接続詞を用いて時の前後関係を表わすことが多い。次頁では接続詞と過去時制と過去完了との関係をみていくことにする。

i) **when** と過去完了

2つの動作が連続して起こり、その2つの前後関係が文脈から読み取れる場合、**when** 節にも過去時制、主節にも過去時制を用いる。

202. **When he *called* her a liar she *smacked* his face.** — Tomson and Martinet (1986⁴)

(彼が彼女のことを嘘つきと言ったとき、彼女は彼の顔に平手を食らわした。)

203. **When he *opened* the window the bird *flew* out.** — Tomson and Martinet (1986⁴)

(彼が窓を開けると、鳥が外へ飛び出した。)

204. **When the play *ended* the audience *went* home.** — Tomson and Martinet (1986⁴)

(芝居が終ると、観客は家路についた。)

205. **When I *read* the letter, I *got* a real shock.** — 江川(1991³)

(手紙を読んで、ひどいショックを受けた。)

しかしながら、2つ目の出来事が始まる前に最初の出来事が既に完了していたことを強調する場合には、**when** 節の中の動詞を過去完了にする。

206. **When I *had opened* the window, I *sat* down and *had* a cup of tea.** — Swan (2016⁴)

(窓を開けてしまったから、座ってお茶を飲んだ。)

207. **When he *had had* his supper, he *went* to bed.** — Hornby (1975²)

(彼は夕食を食べてからベッドに入った。)

208. **When the Anthem *had been played*, the concert *began*.** — Hornby (1975²)

(国歌の演奏が終わると、音楽会が始まった。)

209. **When he *had shut* the window we *opened* the door of the cage.** — Tomson and Martinet (1986⁴)

(彼が窓をしっかりと閉めると、私たちは鳥籠の扉を開けた。)

210. **When she *had sung* her song she *sat* down.** — Tomson and Martinet (1986⁴)

(彼女は歌を歌い終わると、座った。)

211. **When he *had done* his homework, he *watched* television.** — 江川(1991³)

(宿題をしてしまうと、彼はテレビを見た。)

ii) **before** と過去完了

2つの動作が連続して起こり、その2つの前後関係が文脈から読み取れる場合、副詞節にも主節にも過去時制を用いる。とくに接続詞が **before** のときは両方の節ともに過去時制を用いるのが普通である。

212. He *opened* the window *before* he *got* into bed. — Hornby (1975²)

(彼はベッドに入る前に窓を開けた。)

213. The bus *started* just *before* I *reached* the bus stop. — Hornby (1975²)

(バスは、もうちょっとで僕がバス停に着くという時に、出てしまった。)

214. The fire *had burnt out* *before* the fire engines *arrived*. — OALD⁶

(消防車が到着する前に全焼していた。)

2つ目の出来事が終わらないうちに最初の出来事が遂行されたことを表わす場合には、**before** 節には過去完了を用い、主節には過去時制を用いる。この場合、主節の過去時制の動作が **before** 節の過去完了の動作より先行することに注意しなければならない。

215. *Before* we *had finished* our meal he *ordered* us back to work.

(私たちが食事を終わらないうちに、彼は私たちに職場に戻れと言いました。)

— Tomson and Martinet (1986⁴)

216. *Before* we *had walked* ten miles he *complained* of sore feet.

(彼は、私たちが10マイルも歩かないうちに、足が痛いと言い出しました。)

— Tomson and Martinet (1986⁴)

Dr. Higgins's room

Jespersen (1931) は、過去の連続する X と Y という二つの出来事について述べるのに、次のような6通りの表現形式があると述べている。

The relation between two successive incidents in the past, X and Y, e.g. my seeing him (X) and his seeing me (Y), may be graphically represented thus

———— X ————— Y ————— (now).

Linguistically they may be expressed by means of two preterits:

I saw him (first), and then he saw me — or, combined,

I saw him before he saw me.

But if we use the pluperfect:

I had seen him before he saw me.

I saw him before he had seen me.

He saw me after I had seen him.

He did not see me till I had seen him — the two incidents are grammatically connected by means of the tenses.

Dr. Higgins's room

上の Jespersen の説明に関して安藤(1983)は次のような解説をしている。

私が彼を先に見、次に彼が私を見たという現実世界の事情は、言語的には次のように表現できる (cf. Jespersen, 1931:82)。まず、どちらの事件も過去時制を用いて、

(i) a. I saw him (first) and then he saw me.

b. I saw him before he saw me.

のように表現することもできるし、また、(ii)のように、どちらか一方の事件を過去完了相を用いて表現することもできる。

(ii) a. I had seen him before he saw me.

b. I saw him before he had seen me.

c. He saw me after I had seen him.

d. He didn't see me till I had seen him.

(i)(ii)の諸例において、初学者が疑問を抱くのは、(i)bと(ii)bである。(i)bの場合は、「私が先に彼を見た」という先行する事件がなぜ **I had seen him** と過去完了相にしていないのか。(ii)bの場合は、先行する事件が過去時制、後続する事件が過去完了相になっているのは文法に合わないのではないかという疑問である。この二つの疑問については、次のように答えることができる。まず、(i)bの場合、**I had seen him** と過去完了相にしなかったのは、**before** の意味が時間のずれを論理的に明らかにしているので、話し手は、そのずれを更に言語的に補強する必要を認めなかったためであり、(ii)bの場合は、「私が彼を見た」時(過去)には、彼が私を見るという事件は「まだ完了していなかった」(過去完了相)と説明される。この関係は、(iii)のようにパラフレーズできよう。

(iii) **When I saw him, he had not seen me.**

これは要するに、(ii)bの過去完了相は過去時制が後転移したものではなく、**before he shall have seen me** という未来完了相が過去に転移したものであるということに他ならない。

iii) **after** と過去完了

after も **before** と同じように時の前後関係を表わす語なので、過去完了を使う必要性がなさそうに思えるが、**after** 節には過去完了を用いるのが一般的である。

217. **After the will *had been read* there *were* angry exclamations.** — Tomson and Martinet (1986⁴)
(遺言状が読みあげられた後で、不満の怒りの声があがった。)
218. **She *didn't feel* the same **after** her dog *had died*.** — Swan (2016⁴)
(飼っていた犬が死んでからは、彼女は気持ちが変わってしまった。)
219. **After the noisy children *had gone* to bed, there *was* peace and quiet in the house.** — 江川 (1991³)
(うるさい子どもたちが寝てしまうと、(ようやく) 家の中がすっかり静かになった。)
220. **I *reached* the station **after** the train *had left*.** — Hornby (1975²)
(列車が出た後に、私は駅に到着した。)
221. **We *got to* the hall **after** the concert *had started*.** — Hornby (1975²)
(コンサートが始まった後に、私たちは会場に着いた。)
222. **For several years **after** Dick (*had*) *left school*, he *worked* in a zoo.** — Hornby (1975²)
(ディックは学校を出た後数年間、動物園で働いた。)
223. **Five years later, **after** Billy (*had*) *died*, Ally *told* me the true story.** — WISDOM (2019⁴)
(ビリーが死んで五年後、アリーは真実を話してくれた。)
224. **They *ran* out to play **after** they *had finished* breakfast.** — Hornby (1975²)
(彼らは朝食をすませるとすぐに外へ遊びに行った。)
225. **After we *had had* tea, we *felt* warm again.** — 木村 (1967)
(お茶を飲んだので、また体が温まるような気がした。)

iv) **as soon as** と過去完了

2つの出来事が順次起こっている場合には、副詞節にも主節にも過去時制を用いるのが普通であるが、最初の出来事が二番目の出来事の始まる前に完了したことを強調する場合には、**as soon as** に導かれる節に過去完了を用いる。

226. **As soon as Megan *arrived*, we *sat* down to eat.** — Swan (2016⁴)
(ミーガンが到着するや否や我々は腰を下ろして食べた。)
227. **As soon as he *heard* that, he *turned* pale.** — Curme (1931)
(彼はそのことを聞くや否や青ざめた。)
228. **As soon as he *had finished* his exam, he *went* to Paris for a month.** — Swan (2016⁴)
(彼は試験が終わるや否や、一か月パリへ行った。)

v) **had no sooner**～**than**…

二つの過去の出来事が前後相接して起こったことを表わす形で、「～するやいなや…した」と訳される。**no sooner** の他に **hardly, scarcely** なども用いられることもあるが、その場合の接続詞は **when** と **before** が用いられる。

229. **I had no sooner closed the door than somebody knocked.** — Swan (2016⁴)

(ドアを閉めるやいなや誰かがノックした。)

230. **He had no sooner drunk the coffee than he began to feel drowsy.** — Tomson and Martinet (1986⁴)

(彼はそのコーヒーを飲むやいなや眠くなってきた。)

231. **The party had no sooner started than it began to rain.** — 安井 (1996²)

(パーティが始まるやいなや雨が降り出した。)

232. **He had scarcely heard the news before he hastened to the spot.** — 安井 (1996²)

(彼はその知らせを聞くやいなや現場に急いだ。)

233. **I had scarcely started before a man came up to me.** — Maugham, *Mr. Know-All*

(私が出かけるとすぐに一人の男が近づいてきた。)

234. **She had no sooner left the room one day than he heard a noise on the stairs.** — Hardy, *The Son's Veto*

(ある日、彼女が部屋を出て行ったと思うや彼は階段で大きな物音を聞いた。)

否定語の **no sooner, hardly, scarcely** などが文頭に出て倒置文になることもしばしば見られる。

235. **No sooner had he drunk the coffee than he began to feel drowsy.** — Tomson and Martinet (1986⁴)

(彼はそのコーヒーを飲むやいなや眠くなってきた。)

236. **No sooner had the party started than it began to rain.** — 安井 (1996²)

(パーティが始まるやいなや雨が降り始めた。)

237. **Scarcely had he heard the news before he hastened to the spot.** — 安井 (1996²)

(彼はその知らせを聞くやいなや現場に急いだ。)

この構文の基本形は「過去完了+過去形」であるが、「現在完了+現在形」「過去形+過去形」「現在形+現在形」などの構造も見られる。安藤 (2005) によれば、主節の動詞が *see, come, sit down* のような「瞬時的」動詞の場合は単一時制を用いる傾向があるという。また、主節の動詞が「be 動詞+補語」の形で動作の結果を表わしている場合には「過去形+過去形」が一般的な形であるようである。

238. **He no sooner earns any money than he spends it.** — Tomson and Martinet (1986⁴)

(彼はお金を稼ぐやいなやすぐ使ってしまう。)

239. **You no sooner come, Mr. Weller, than you go again.** — Dickens, *The Pickwick Papers*

(ウェラーさん、あなたはお越しになったと思うと、すぐにまた帰られるのですね。)

240. **No sooner were these proceedings completed than Mrs. Pearson appeared.**

(これらの手続きが終わるやいなやピアソン夫人が姿を現した。)

— Christie, *The Big Four*

③ 実現しなかった希望や願望を表わす用法

hope, expect, intend, think, want, mean, suppose などを過去完了で用いると実現しなかった希望や願望を表わす。

241. **I *had hoped* we would leave tomorrow, but it won't be possible.** — Swan (2016⁴)

(明日出発できればと思っていたが、不可能のようだ。)

242. **He *had intended* to make a cake, he ran out of time.** — Swan (2016⁴)

(彼はケーキを作るつもりだったが、時間がなくなった。)

243. **I *had thought* I was going to be invited to their wedding.** — 江川(1991³)

(私は彼らの結婚式に招待されるものと思っていました。)

244. **They *had wanted* to help but couldn't get here in time.** — Hornby (1975²)

(彼らは手伝いをしたかったのだが、ここへ来るのが間に合わなかった。)

245. **I *had meant* to call on you, but was prevented from doing so.** — Hornby (1975²)

(あなたを訪問するつもりだったが、都合があつてそうできなかった。)

本動詞に to-不定詞が伴うときは、「単純過去時制＋完了不定詞」の形でも実現しなかった希望を表わすことはできる (Hornby, 1975)。

246. **I *meant* to have called on you, but was prevented from doing so.** — Hornby (1975²)

(あなたを訪問するつもりだったが、都合があつてそうできなかった。)

否定文では逆に実現したことを表わすことになる。

247. **I *hadn't* for a minute *expected* that I should get the first prize.** — Hornby (1975²)

(一等賞をもらうなどとは夢にも思っていなかったのに。)

④ 時制の一致の用法 (間接話法における過去完了)

主節の動詞が過去形になれば、従節の動詞の過去形や現在完了相は過去完了相になる。しかし、文脈から時の前後に誤解の恐れのない場合には過去形は過去形のままでよい。また、256.のように最初から過去完了相はそのまま過去完了相のままでよい。

248. **I think the building was abandoned long ago.** — 綿貫 & Mark Petersen (2006)

(私はその建物はずっと前に廃屋になったのだと思う。)

→ **I thought that the building had been abandoned long before.**

(私はその建物はずっと前に廃屋になったのだと思った。)

249. **She says that she was married to a lawyer.** — 綿貫 & Mark Petersen (2006)

(彼女は弁護士と結婚していたと言っている。)

→ **She said that she had been married to a lawyer.**

(彼女は弁護士と結婚していたと言った。)

250. **I think that she will not come, as she was sick yesterday.** — 安井(1996²)

(私は、彼女は昨日具合が悪かったので、来ないだろうと思う。)

→ **I thought that she would not come, as she had been sick the previous day.**

(私は、彼女は前日に身体の具合が悪かったので、来ないだろうと思った。)

251. **He said, "My mother came home yesterday."** — 木村(1967)

(彼は「母は昨日帰宅した」と言った。)

→ **He said that his mother had come home the day before.**

(彼は、母は前日に帰宅しましたと言った。)

252. **He said, "I've been in England for ten years."** — Tomson and Martinet (1986⁴)

(彼は、「私はイギリスに10年います」と言った。)

→ **He said that he had been in England for ten years.**

(彼はイギリスに10年いると言った。)

253. **She said, "I'll lend you the book as soon as I have read it myself."**

(彼女は「自分が読んでしまったらすぐにその本を貸しましょう」と言いました。)

→ **She said she'd lend me the book as soon as she'd read it herself.**

(彼女は、読んでしまったらすぐにその本を私に貸してやると言った。)

— Tomson and Martinet (1986⁴)

254. **"I bought this pearl for my daughter," said Mrs. Adams.** — 江川(1991³)

(「この真珠は娘に買ってやったのです」とアダムズ夫人は言いました。)

→ **Mrs. Adams said she had bought the pearl for her daughter.**

(アダムズ夫人はその真珠は娘のために買ってやったのだと言いました。)

255. “The exhibition *finished last week*,” *explained* Ann. — Quirk et al. (1985)

(「展覧会は先週終わりました」とアンが説明した。)

→ Ann *explained* that the exhibition *had finished the preceding week*.

(アンは展覧会がその前週に終了したことを説明した。)

256. The manager *says* that the road *had already been* completed when he arrived in 1990.

(支配人は彼が 1990 年に着いた時には、道路はもう完成していたと言う。)

→ The manager *said* that the road *had already been* completed when he arrived in 1990.

(支配人は彼が 1990 年に着いた時には、道路はもう完成していたと言った。)

— 綿貫 & Mark Petersen (2006)

⑤ 仮定法過去完了の用法

過去の事実に対の仮定を述べる際、If 節に過去完了形を用いる。主節（帰結節）には would / could / might / should + have p.p. の形で結ぶのが基本である。

257. If I *had left* home at seven, I *would have been* in time. — 安井(1996²)

(もし7時に家を出ていたならば、間に合っていただろうに。)

258. If we *had found* him earlier we *could have saved* his life. — Tomson and Martinet (1986⁴)

(もしもっと早く彼を見つけていたなら、我々は彼の命を救うことができただろうに。)

259. If we *had found* him earlier we *might have saved* his life. — Tomson and Martinet (1986⁴)

(もしもっと早く彼を見つけていたなら、我々は彼の命を救うことができたかもしれない。)

If 節に過去完了を用いた場合、主節（帰結節）に用いられる would / could / might / should の区別で、could 「できたのに」と might 「だったかもしれない」の使用は、その意味に負うところが大きい。そして would を用いるか should を用いるかの区別は、本来の will と shall の使用規則に準じる。すなわち、1 人称の単純未来以外は would が用いられるということである。しかしながら、現代では 1 人称の単純未来と意志未来の助動詞の区別（単純未来なら shall, 意志未来なら will）もほぼなくなっていると言っても過言ではないので、should については考える必要はないようである。しかしながら、仮定法とは関係なしに、should have + p.p. で「～すべきだったのに」という意味で使うことは多く、この意味で should を使うことはある。

260. If I *had drunk* this, I *should have died*. — 伊藤(1979)

(もしこれを飲んでいたら死んでいただろう。)

261. If he *had apologized*, you *should have done* so too. — A Student's Grammar of the English Language (1990)

(彼が謝っていたとしたら、あなたもそうすべきだったのに。)

(11) 過去完了進行相 (過去完了進行形) の用法

過去完了進行相は過去のある時点まで、或いはその少し前まで続いていた出来事や行為について述べる場合に用いられる。現在完了進行相が「継続」の意味を表わすように、過去完了進行相も「継続」の意味を表わす。また、瞬間的な動作を表わす動詞を進行相で用いられると「反復」の意味が表されることは、他の進行相の場合と同じである。

262. Tom *had been waiting* an hour before the train came in. 《動作の継続》 — 安井 (1996²)

(列車が入ってくるまで、トムは1時間も待っていた。)

263. He thought I *had been living* there for some time. 《状態の継続》 — 安井 (1996²)

(彼は私がしばらくの間ずっとそこに住んでいたと考えていた。)

264. The boy was delighted with his new knife. He *had been wanting* one for a long time.

(その少年は新しいナイフをもらって大喜びだった。長い間、欲しいと思っていたから。)

— Tomson and Martinet (1986⁴)

265. Henry *had been working* at that company for five years when it went out of business.

(ヘンリーはその会社が廃業するまで5年間働いていた。)

— 綿貫 & Mark Petersen (2006)

266. When Ted came to the school in 1965, Mr. Robinson *had already been teaching* there for five years.

(1965年に、テッドがその学校に来た時、ロビンソン先生はすでに5年間そこで教えていた。)

— Hornby (1975²)

267. Jenny was annoyed. Jim *had been phoning* her every night for a whole week. 《反復》

(ジェニーは困っていた。ジムが一週間の間毎晩電話をかけてきていたから。)

— Alexander (1988)

過去完了進行相は過去のある基準時まで行為や出来事が〈継続〉していたことを表わすのが基本であるが、過去のある基準時の少し前に行為や出来事が終わっている場合にも、その結果が残存している場合には使われる (Alexander 1988:177)。

268. She was very tired. She'd *been typing* letters all day. — Alexander (1988)

(彼女はとても疲れていた。一日中手紙をタイプしていたのだから。)

269. When I found Emily, I could see that she *had been crying*. — Swan (2016⁴)

(エミリーを見つけた時、彼女が泣いていたことがわかった。)

270. It was plain from her face that she *had been drinking*. — 安藤 (2005)

(彼女が酒を飲んでいただけは顔を見れば明らかだった。)

(12) 未来完了相（未来完了形）の用法

現在完了が現在を基準にし、過去完了が過去のある時点を経験点にして、その時点までの「完了」・「結果」・「経験」・「継続」などを表わすのと同じように、未来完了は未来のある基準時までの「完了」・「結果」・「経験」・「継続」などを表わす形である。will / shall have + 過去分詞で表わされる。

① 完了を表す用法

未来のある基準時までには、ある出来事が済んでしまうだろうことを述べる。

271. **By this time next year George will have taken his university degree.** — Hornby (1975²)

(来年の今頃までには、ジョージは学位を取ってしまっていることだろう。)

272. **I shall have finished it when you come home next month.** — 木村 (1967)

(来月君が帰宅するときには、私はそれをやり終えていることだろう。)

273. **I will have read through this book several times by the time the next examination begins.**

(次の試験が始まる迄に、私はこの本を何回も読んでしまっておこうと思う。) — 木村 (1967)

274. **He will have finished this work before you leave.** — 安井 (1996²)

(あなたが出発する前までには、彼はこの仕事を終えてしまっているでしょう。)

275. **The builders say they will have finished the roof by Tuesday.** — Swan (2016⁴)

(大工たちは遅くとも火曜日までに屋根を終わらせると言っている。)

276. **I'll have spent all my savings by the end of the year.** — Swan (2016⁴)

(年末までには貯金を全部使い果たしてしまうことだろう。)

② 結果を表す用法

未来のある基準時にはどうなっているか、その時の結果状態を述べる。

277. **He will have gone to Tokyo when you come home next month.** — 木村 (1967)

(来月君が帰宅するときには、彼は東京へ行ってしまう、ここにはもういないだろう。)

278. **This lake will probably have frozen by Christmas.** — 綿貫 & Mark Petersen (2006)

(この湖はクリスマスまでには、たぶん、もう凍ってしまっているでしょう。)

279. **By the time the missile reaches its goal, the population will have been warned.** — 安井 (1996²)

(ミサイルがその目標地点に到達する前に、住民はすでに警告を受けるに至っているであろう。)

③ 経験を表す用法

未来のある基準時までには、ある事を経験してしまっているだろうということを述べる。

280. **You will have seen the world before you are twenty.** — 木村 (1967)

(二十歳になるまでに、世間をみていることだろう。)

281. **If I visit Paris again, I'll have been there ten times.** — 安井 (1996²)

(再びパリを訪れれば、10回行ったことになる。)

282. **I will [shall] have read Hamlet five times if I read it again.** — 安井 (1996²)

(今度また読めば、5回ハムレットを読んだことになる。)

④ 継続を表す用法

未来のある基準時まで、ある出来事や状態が引き続き行われることを述べる。

283. He *will have lived* here for full ten years when April comes next year. — 木村(1967)

(来年の四月が来れば、彼はここに丸 10 年間住んだことになるだろう。)

284. By the end of next month he *will have been* here for ten years.

(来月の末で、彼はここに 10 年いたことになるだろう。)

— Tomson and Martinet (1986⁴)

285. In the year 2000 we'*ll have been married* (for) thirty years.

— Hornby (1975²)

(2000 年になったら、私たちは結婚して 30 年経ったことになる。)

(13) 未来完了進行相 (未来完了進行形) の用法

現在完了進行相が「動作の継続」を強調するとき用いられるのと同じように、未来完了進行相も動作がずっと継続中である場合に用いられる用法であるが、現実には未来完了進行相はあまり用いられないようである。

286. By Christmas I *shall have been working* in this office for ten years. — Allen (1974⁵)

(クリスマスで、10 年間この会社で働いたことになる。)

287. When George gets his degree, he *will have been studying* for four years. — Hornby (1975²)

(ジョージが学位を取るころには、4 年間学んでいたことになる。)

288. I'*ll have been teaching* for twenty years this summer.

— Swan (2016⁴)

(私はこの夏で 20 年間教鞭をとったことになる。)

289. By this time next week, I *will have been working* for this company for 24 years.

(来週の今頃、この会社に 24 年間勤めたこととなります。)

— Alexander (1988)

<<< 参考図書 >>>

- 「時制と態」(英文法シリーズ 特製版 第二集) 福村虎次郎 (1959年 研究社)
- 『開拓社叢書9 テンスとアスペクトの語法』 柏野健次著 (1999年発行 開拓社)
- 『コーパス英文法』 柏野健次 内木場努著 (1991年発行 開拓社)
- 『高等英文法』 アニアンズ著 安藤貞雄訳 (1971年発行 文建書房)
- 『現代英米語用法事典』 安藤貞雄 山田政美編著 (1995年発行 研究社)
- 『英語発達史』 中島文雄著 (1979年改訂版発行 岩波書店)
- 『古代中世英語初歩』 市川三喜著 (1955年改訂版発行 研究社)
- 『クエスチョン・ボックスシリーズ 6 時制・法・態』 石橋幸太郎編集主幹 (1960年発行 大修館書店)
- 『歴史的にさぐる 現代の英文法』 中尾俊夫・児玉修編者 (1990年発行 大修館書店)
- 『続 日本人の英語』 マーク・ピーターセン著 (1990年発行 岩波新書)
- 『謎解きの英文法 文の意味』 久野暉・高見健一著 (2005年発行 くろしお出版)
- 『謎解きの英文法 動詞』 久野暉・高見健一著 (2017年発行 くろしお出版)
- 『英文法精解 改訂版』 木村明著 (1967年発行 培風館)
- 『英文法解説』 江川泰一郎著 (1991年改訂第3版発行 金子書房)
- 『英文法総覧』 安井稔著 (1996年改訂版発行 開拓社)
- 『徹底例解ロイヤル英文法』 綿貫陽 宮川幸久 マーク・ピーターセン 他共著 (2002年発行 旺文社)
- 『表現のための 実践ロイヤル英文法』 綿貫陽 マーク・ピーターセン共著 (2006年発行 旺文社)
- 『英文法教室』 伊藤和夫著 (1979年発行 研究社)
- 『現代英文法講義』 安藤貞雄著 (2005年初版発行 開拓社)
- 『英語教師の文法研究』 安藤貞雄著 (1984年再版発行 大修館書店)
- 『英語学ライブラリー (37) 現代英語の過去と完了 英語動詞の相対相』 中条和夫訳 (1959年発行 研究社)
- Practical English Usage*, Swan, M. (2005³ Oxford University Press)
- 『第3版オックスフォード 実例現代英語用法辞典』 Michael Swan 著 吉田正治訳 (2007年発行 研究社/オックスフォード 大学出版局)
- Practical English Usage*, Swan, M. (2016⁴ Oxford University Press)
- 『第4版オックスフォード 実例現代英語用法辞典』 Michael Swan 著 吉田正治訳 (2018年発行 研究社/オックスフォード 大学出版局)
- A Practical English Grammar*, Thomson, A.J. and A.V. Martinet (1986⁴ Oxford University Press)
- 『第4版 実例英文法』 AJ トムソン/AV マーティネット著 江川泰一郎訳注 (1988年発行 オックスフォード 大学出版局)
- Guide to Patterns and Usage in English*, Hornby, A.S. (1975² Oxford University Press)
- 『英語の型と語法』 AS ホーンビー著 伊藤健三訳注 (1977年発行 オックスフォード 大学出版局)
- The Philosophy of Grammar*, Jespersen, O. (1924 George Allen & Unwin)
- 『文法の原理 (中)』 イェスペルセン著 安藤貞雄訳注 (2006年発行 岩波書店)
- A Modern English Grammar on Historical Principles: part IV.* Jespersen, O. (1931, George Allen & Unwin)
- SYNTAX*. Curme, G.O. (1931 D.C. Heath and Company. rpt. 1959, Tokyo Maruzen)
- A STUDENT'S GRAMMAR OF THE ENGLISH LANGUAGE*, Sidney Greenbaum, Randolph Quirk (1990 Longman)
- 『現代英語文法大学編』 シドニー・グリーンバウム/ランドルフ・クワーク著 池上嘉彦他訳 (1995年新版発行 紀伊国屋書店)
- The English Verb*. Palmer, F.R. (1988² Longman)
- Linguistics in Philosophy*, Vendler, Z. (1967 Cornell University Press)
- Meaning and the English Verb*, Leech, C.N. (1971 Longman)

Meaning and the English Verb, Leech, C.N. (2004³ Longman)
Longman English Grammar, Alexander, L.G. (1988 Longman)
Living English Structure, Allen, W.S. (1974⁵ Longman)
How to do things with words, Austin, J.A. (1978² Harvard University Press)
A Reference Grammar for Students of English, Close, R.A. (1975 Longman)
 “ *Will in If-clauses*, ” *Studies in English Linguistics for Randolph Quirk*, ed. By S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvic, Close, R.A. (1980 Longman)
 “ *The Use of the Progressive Form in English*, ” *Language*27, 254-280, Hatcher, A. G. (1951)
English as a Foreign Language, Close, R.A. (1981³ Longman)
The Verb System of Present-Day American English, Allen, R.L (1966 Mouton)
 「フランス語動詞事象の意味分類に関する考察」平嶋里珂 (2003年3月『関西大学外国語教育研究』第5号)
 『ウィズダム英和辞典 第3版』井上永幸 赤野一郎編 (1998年発行 三省堂)
 『ウィズダム英和辞典 第4版』井上永幸 赤野一郎編 (2019年発行 三省堂)
 『オーレックス英和辞典 第2版』野村恵造 花本金吾 林龍次郎編 (2016年発行 旺文社) **【OLEX²】**
 『ジーニアス英和辞典 第5版』南出康世編集主幹 (2014年発行 大修館書店)
 『新英和中辞典 第7版』竹林滋 東信行 諏訪部仁 市川泰男編 (2003年発行 研究社)
 『ルミナス英和辞典 第2版』竹林滋 小島義郎 東信行 赤須薫編 (2005年発行 研究社)
 『英語基本動詞辞典 普及版』小西友七編 (1985年発行 研究社)
 『新英文法辞典 改訂増補版』大塚高信編 (1971年発行 三省堂)
 『新英語学辞典 縮刷版』大塚高信・中島文雄監修 (1987年発行 研究社)
 『大修館英語学事典』松浪有他編 (1989³年発行 大修館書店)
Oxford Advanced Learner's Dictionary, (2000⁶ Oxford University Press) **【OALD⁶】**
Longman Advanced American Dictionary, (2007² Pearson Education Limited) **【LAAD²】**